「D．H．」

愛莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「Ｄ．Ｈ．」

【Ｎコード】
Ｎ１５３１Ｖ

【作者名】
愛莉

【あらすじ】
行方不明事件・廃墟ビルからの飛び降り自殺・研究所への監禁。実態の分からない組織に翻弄される、いくつもの運命・・・。※性的な表現、グロテスクな表現あり。１５歳以上推奨。１～２日に１ページ更新。【ＳＦ恋愛サスペンス】

1

妹のリンが遺体で見つかった。死因は自殺。街外れにある廃墟ビルの屋上から飛び降りたらしい。ポケットには遺書らしきメモが残されていた。そこにはたった一文、「生きているのが怖い」とだけ書かれていた。

＋＋＋＋＋

今から一ヶ月前のこと。リビングに顔を出したリンは、いつもと変わりない笑顔を浮かべていた。

「リア、これからザックの家に行ってくるわ」

「行ってらっしゃい。あ、夕飯はどうするの？」

「一緒に食べてくるからいらないよ。帰りは遅くなると思うから、リアは先に寝ててね」

リンとザックは二年くらい前から付き合っていて、週末には必ずデートしていた。ザックは可愛らしいリンにお似合いなカッコいい人で、仲良しな二人が羨ましかった。彼氏がいないから余計にそう思っていたのかもしれないけれど。

「それじゃ、行ってきます」

私は玄関で幸せそうなリンを見送った。それが元気なリンを見た最後になるなんて――。

翌朝、リンの姿はどこにもなかった。携帯も電源が切られていて

通じない。不安になって、すぐにザックに電話した。
『リンならちゃんと帰りましたよ』
「帰ったの、何時頃だったか覚えてる？」

ザックは少し沈黙してから答えた。
『確か……十二時頃だったと思います』
「家に戻ってきてもいないみたいだし、携帯も通じないし……。ザック、どこへ行ったか知らない？」

ザックは何も知らないらしく、取りあえず友達に片っ端から連絡を取ってみると言って電話を切った。私たちは両親を事故で失っていて身寄りもなく、たった二人きりの家族だった。出かけるときは必ず行き先を伝えるし、お互いに協力し合いながら生活している。

そんなリンが、連絡もなく帰ってこないなんてことありえない。携帯の電源もずっと切られたままだし……。何かの事件に巻き込まれたのかもしれない。

2

会社に休みの連絡を入れると、急いで警察署に行った。そこで必死になって話をしたけど、警察官は白々しく溜め息をついた。

「一日帰ってこない程度で捜索願なんて。オーバーだね」

「でも、今までこんなことは一度もなかったんです。連絡も取れないし。絶対、何らかの事件に――」

「とにかく、その程度のことじゃ警察は動かないよ。こっちは忙しいんだ。邪魔だからさっさと帰って」

掴みかかりたくなる衝動を必死で堪え、警察署を後にした。こんな奴らが警察なんて名を気取ってるから、この国は世界一の犯罪国家と言われるんだ。そんなことを思っていると、ザックから電話がかかってきた。

『リンの友達も俺の友達も、リンから連絡はないって。俺、どうしたら……』

ザックの声は微かに震えていた。

「ねぇザック。昨日はどんなふうに過ごしてたの？　喧嘩したとか、何か変わったことは？」

『別に普通でした。いつもみたいに一緒に買い物に行って、寮の部屋に帰ってきてリンの手料理を食べて。帰りも車で真っ直ぐ家に向かったはずです』

ザックと一緒のときに、変わった様子はなかったみたいだ。リンの身に何かあったとするなら帰宅途中だろう。

「警察はアテにならないし、今は心当たりをいろいろ捜してみることにするわ」
『分かりました。俺もできる限りの友達をあたってみます』
電話を切ると、リンがよく行っていた場所を次々とあたってみた。でも何の手がかりも得られず、結局その日は帰宅することになった。帰ってもリンはいない。携帯も相変わらずだし。一体どこに行ってしまったんだろう――。

ソファにもたれて呆然としていると、玄関のチャイムが鳴った。その音で我に返る。外はいつの間にか明るくなっていた。
「リアさん……」
玄関先に立っていたのはザックだった。私はザックをリビングに通し、温かい紅茶を出した。

「――そう、やっぱりリンから連絡はないのね」
「はい。友達にも協力してもらったけど、誰もリンとは連絡が取れないみたいで。メールに返信もないし」
手詰まりといった感じで、ザックは声を小さくした。

3

「もう一度、警察に行ってみませんか？」
「確かに……私たちにはできることが限られてるものね。何としてでも捜査してもらいましょう」
家を出ると、ザックの運転で警察署に向かった。出てきたのは昨日と同じ警察官。私とザックは現状を説明した。

「実は昨日、君たちと同じような人が数人いたんだよ。『家族と連絡が取れない』ってね。連続誘拐事件かもしれないってことで、一応は捜査本部を設置したんだけど。もしかしたらその子も、他の人たちと同じ状況かもね。警察は警察で動いてる。君たちは君たちで心当たりをあたってみればいいんじゃないか？」

「手詰まりだから何とかしてくれっつってんだろーが！」
ザックが怒鳴ると、警察官は露骨に面倒くさそうな顔をした。

「やれやれ。彼女を深夜に一人で帰すような男に言われたかないね」
「クソッ……」
悔しそうに悪態をつきながら、ザックは拳を握りしめていた。
「とにかく帰ってくれ。邪魔なんだよ」

警察署を出ると、ザックは私に謝った。
「俺がリンを家まで送っていけば、こんなことにはならなかったかもしれないのに……」
「リンは車だったんだもの。ザックのせいじゃないわ」
それにしても、何だか不自然な気がする。歩いているところを誘

拐されたならともかく、車を運転して帰ってくる最中に誘拐って……。

でも現に、リンの他にも同じように行方の分からない人がいるわけで。タイミングがよすぎるし、無関係とは思いにくい。誘拐以外の事件に巻き込まれたという可能性もあるし。

お互い何か分かったら連絡をするということでザックと別れ、私は家に戻った。何をしていいかも分からない。――そういえば、今日は欠勤の連絡を入れてなかったっけ。今更だけど、私は会社に連絡を入れた。

電話で簡単に現状を説明すると、明日からはきちんと仕事に出ると話した。ホントは仕事をする気持ちの余裕なんてないけど、いつまでも休み続けるわけにはいかないし……。何もできない自分がもどかしかった。

1

それから何の進展もなく、もちろんリンからの連絡もなく、一ヶ月が経った今日。もうリンは帰ってこないのかもしれないと半ば諦めかけていた私に、警察から一本の電話が入った。リンが街外れの廃墟ビルで、血を流して死んでいるのが見つかった――と。

現場の状況から見て、リンは自殺で間違いないと説明された。恋人と楽しい時間を過ごしたあと、一ヶ月も行方不明になっていて、自殺？　どうしても信じられない。

警察は警察で一応は調べたみたいだったけど、行方不明になってから遺体発見までの目撃情報もなく、ポケットの中にあった遺書のようなものがリンの直筆だと鑑定結果も出た。飛び降りたときの衝撃からか顔や手足に細かな傷ができて、それが現場の砂利で付いたものとの確認もされた。

発見現場での飛び降りで間違いないと断定され、調査はあっという間に打ち切り。でも、どうしても納得いかなかった。

「リンは殺されたんだわ。自殺に見せかけて」

――２０８８．５．２９．リン＝ウェルズ　ここに眠る――　リンのお墓に花を手向けると、私はザックの方を向いた。

「だっておかしいじゃない。こんなの……」

涙で視界が歪んだ。――そう、リンは殺されたに決まってる。行方不明になっていた一ヶ月の間に何かあって、そして自殺に見せか

け殺された。そうとしか思えない。

「警察が動いてくれないなら、私が自分で調べるわ。このままじゃリンが報われないもの」

「けど、そんなの危険ですよ。もし本当にリンが殺されたのだとしたら、いろいろ嗅ぎまわってる人間がいると犯人に知れて、リアさんまで殺されるかもしれないじゃないですか」

ザックの言うことも分かる。でも……もし私の身に何かあったとしても、事件の真相が知りたかった。リンはたった一人の家族だったのだから。たとえ自殺というのが本当だったとしても、自殺に至るまでの経緯があったはずだし。

2

「もちろん、ザックまで危険な目に合わせるつもりはないわ。私は自分の手で、真実を捜し出してみせる」

リンのお墓にそう誓いを立てる。すると隣でザックが頷いた。

「……分かりました。俺ももう一度、自分なりに調べてみます」

確かにザックも私と同じように、リンを失って悲しんでいるはず。私たちはお互いに協力を約束し、リンのお墓を後にした。

私はまず、リンが飛び降り自殺したとされる廃墟ビルの前を訪れた。現場にはリンの友達が持ってきたであろう花束がいくつか置かれている。それを目にしたら涙が浮かんできた。でも……悲しんでばかりはいられない。

ビルといっても五階建てで、比較的小さなものだ。市街から離れたところにあり、周りは雑木林となっているけど、大きな倉庫らしきものも建ち並んでいる。古そうだし、現在も使われているものなのかどうか分からないけど……。

民家やお店などはなく、人がいる気配もなかった。リンの死亡推定時刻は夕方らしいから、きっと今とそんなに変わらない雰囲気だったと思う。

それにしてもどうして、リンはこんなところにいたんだろう。女の子一人で立ち寄るような場所じゃないし。誰かに連れてこられたのかもしれない。正面は自動ドアになっているけど、電気は通って

いないわけだし……と思いながら、力強くドアを引いてみる。

雑草が邪魔になっているものの、女性一人の力でも開けられるくらいの強度だった。中は薄暗くてカビ臭い。わざわざリンがこんなところに入ってまで自殺しようなんて思うかしら……。そういえば、リンの車も見つかっていなかった。どこにいってしまったんだろう。

いつまでもここにいても仕方ないか……。誰もいないし、特に変わった様子もないし。廃墟ビルの周りを歩いて一周すると、車に戻ることにした。――と、そのときザックから電話がかかってきた。

3

『今、警察で話を聞いてきたんですけど。リン以外の行方不明になっていた人たち、他は誰も見つかってないそうです。人数はリンを含めて五人。男女年齢はみんなバラバラで、共通点は何も見当たらないって』

他にも不安な思いをしている人がいると思うと、胸が痛んだ。

「行方不明になってる人たちの詳細みたいなものって分かる？」

『それは教えてもらえなかったんです』

ザックは声のトーンを落とし、溜め息をついた。

『一応、食い下がってはみたんだけど……しつこくしたら追い出されちゃったんです。すみません』

他の行方不明者の家族に、何でもいいから話を聞けたら良かったけど……。警察は私たちに協力する気なんてないだろうから仕方ないか。

「ありがとう、ザック。また何かあったら教えてちょうだい」

電話を切ると、まっすぐ家に帰った。これからザックの家までの道のりを歩いて、聞き込みをしてみよう。

警察は何も分からなかったと言ってたけど、そんなの信用できない。もしかしたら何か情報が得られるかも……という可能性にかけたかった。

私はリンの写真を持って、ザックの住む大学の寮までの道を歩きながら、道行く人に何か知らないか尋ねていった。でもリンについ

て見覚えのある人に出会うことはできず、聞き込みは失敗に終わってしまった。

仕事復帰すると調査に時間が割けなくなるから、休みをもらっているうちに何か一つでも進展がほしい。けど、どうすれば……？

リンはザックの部屋から帰る途中、事件に巻き込まれた可能性が高い。それなら、リンと同じ状況を作ってみたらどうだろう。夜十二時頃に、車でザックの部屋から自宅に帰る方向へ走ってみるんだ。もしかしたら何か分かるかもしれない。

もちろん、何の成果も得られない可能性もある。でも、それでも……今の私にできることは、何でもやってみなくちゃ。そんな思いだけが私を動かしていた。

1

「――そんなの、何があるか分からないし危ないですよ。もしリアさんまで行方不明になったらどうするんですか」
その夜、訪れたザックの部屋で強い反対を受けた。

「でもこのくらいしか、もうできることが思いつかないのよ。個人でできることなんて、結局は知れてるもの」
「それはそうかもしれないけど、でも……」
「ありがとう、心配してくれて。だけどね、このままじっとしてるわけにはいかないから」

ザックはソファに座って俯いていたけど、顔を上げて私を見た。
「じゃあ俺も一緒に行きます。リアさん一人に、危険なことをさせるわけにはいきませんから」
「……いいの？」

私の問いかけに、ザックは頷いた。こうして私たちは夜の十二時を過ぎた頃、自宅に向かって車を走らせてみることになった。あの夜、リンが通ったと思われるルートで。

＋＋＋＋＋

「昼間は人通りもそれなりにあるけど、深夜となるとさすがに静かね」
「変わったところも、特にないみたいですね」

運転しながら、チラチラと歩道に目をやる。歩いてる人はいないし、ところどころに家の灯りが見えるくらいで、辺りは暗く静かなものだった。

大学の寮から私の家までは、車で十分程度。道中には民家、小さな公園、マンション、会社など。危険だと思われるような場所は特にない。自宅までの最短ルートであるこの通りを、リンも通ったと思うんだけど……。

「あの日、リンが帰りに寄り道するようなことも言ってなかったのよね？」

助手席のザックに問う。

「……ザック？」

返事がない。慌てて隣に視線をやると、ザックは頭を垂れていた。

「寝てる？」

「う……」

小さな呻き声のようなものが聞こえた瞬間だった。何故か急にまぶたが重くなって、慌ててブレーキを踏んだ。車が急停止する。何だったの？　今のは……。

「――ッ！」

突然、頭に痺れたような痛みが走った。

「リア……さん」

苦しそうにザックが呟く声が聞こえる。それを最後に、私の意識は途切れた。

2

――気が付くと、ベッドのようなものに横たわっていた。首だけ傾けて、場所を確認する。広い部屋で、壁沿いには水道や棚、パソコン台やテーブルなどが並んでいる。

真ん中には大きなテーブルがあり、その上には使いっぱなしの実験器具や顕微鏡がたくさん置かれていた。ここは……どこかの実験室？

「――ザックは！？」

ザックがいないことを思い出し、ベッドから起きようとした。でも何故か、足に力が入らない。上半身を起こしてみたものの、足だけはまるで切り離されているかのようにビクともしない。

どうなっているのか分からず困惑していると、私が寝ているベッドから一番遠い場所に見えるドアが開いた。ドアの前には、白衣姿の女性がタバコを咥えて立っている。

「動こうとしてもムダだよ。大人しく寝てな」

女性は中に入ってくると、咥えていたタバコをテーブルの上の灰皿に押し付けた。煙を吐きながら私の方に歩いてくる。

赤色系のミディアムヘアに、スラッとした細いシルエット、真っ黒なアイラインに真っ赤なルージュ。二十代後半くらいに見える。

「あなた誰？　ここはどこなの？　ザックはどこに行ったの？」

女性を睨みつける。すると女性は冷たい表情でベッドの脇に立っ

た。そして傍にある台からメスを手に取り、私の顔の前に刃を向けた。

「アンタなんか、簡単に殺せるんだけどね」

「――！」

「けどまぁ命令だから。仕方なく生かしてやってんの。生意気な口をたたくようなら殺すよ」

メスの刃が頬に触れる。女性の醸し出す冷たい空気に、私は黙るしかなかった。

「……アンタ、クロルチル製薬会社の研究チームに所属してんだってね」

「どうしてそのことを!?」

「社員証がバッグに入ってたって聞いたけど」

女性はベッドの端に腰掛けると、メスをじっと眺めた。

「逃げようなんて思わない方がいいよ。死ぬから」

「もしかして……リンはあなたが殺したの!?」

「リン？　誰それ」

「とぼけないで！　リンを誘拐して殺したんでしょう!?」

叫ぶと、彼女はまたメスを私に突きつけた。

3

「ウルセーな。さっきも言ったけど、アンタは組織に生かされてるんだよ。世界一と言われるクロルチルの研究チームにいたっていうだけでね。使いモノにならないようなら――」
「ナタリー」

ドアが開いて、白衣姿の男性が入ってきた。ストレートの金髪に茶色のメッシュを入れたヘアスタイル、長身で女性と同じくらいの年齢に見える。

「タクト。アンタ、実験中じゃなかったの？」
「もう終わった。それより……」
タクトと呼ばれた男性は私を見た。
「余計なことを言ってないで、さっさと女に説明してやれ」
「命令しないでよね」

女性――ナタリーは不機嫌そうに立ち上がると、タクトの前に歩いていった。
「悪いけど、アタシはああゆう女が嫌いなの。タクトが世話してやんなよね」
ナタリーはツンとした様子で部屋から出ていった。

「ちょっと、私をどうするつもりなの？」
問いかけると、タクトはこっちに向かって歩いてきた。
「殺しはしない。ただ、二度とここから出られないと思え」
「ふざけないで！　私は――」

「混乱しているだろう。まず、ここがどこなのか説明してやる」
タクトは部屋の真ん中ほどで立ち止まり、椅子に腰掛けた。

「ここはある組織の研究所内部にある実験室だ。俺とナタリーはこの研究所で、組織のために研究をしている。お前は研究員となるため、ここに連れてこられた。

クロルチル製薬会社の研究チームにいた人間だということが分かり、その能力が研究に使えるかもしれないと思われたんだ。今後は俺たちの下で、研究に加担してもらうことになる」

……訳が分からなかった。
「勝手なこと言わないでよ！」
「叫ぼうが喚こうが無駄だ。ここに連れてこられた時点で、もうお前に自由はない」

そんな……。どうしてこんなことになってしまったの？　リンもここに連れて来られてた？　そして逃げようとして、殺されたってことなの？　でもリンはごく普通の大学生で、研究に役立つような知識はないはずなのに――。

1

「どうすれば、家に帰してくれるの？」
「……分からないのか？　無駄だ。諦めろ」
「嫌よ！　帰して！」

急に恐怖が襲ってきて、半ば泣きながら叫んだ。こんな訳の分からない事態に巻き込まれるハメになるなんて。

ザックがどうなったかも分からないし、リンのことも分からないまま。このままいずれ、ここで殺されるかもしれない生活を送らなきゃいけないなんて――。

「俺たちに協力してさえいれば、殺されることはない。安心しろ」
「何が安心よ！　大体、組織って何なの！？」
「……今は殺されないよう、大人しくしているんだな」

殺すつもりはないと言われても、現にこうして監禁されているわけで、これからどうなるかなんて分からない。タクトもナタリーも、信用できる人間じゃないのは確かだった。

タクトはテーブルの上に立ててあった試験管を一つ手に取った。透明な液体が、試験管の三分の一ほど入っている。

「これを飲め。飲めば足が元に戻る」
「足？」
「動かないだろ？　それはナタリーの作った薬のせいだ。これはその薬の効果を消すもの。飲めばすぐ、足が動くようになる」

目の前に試験官が差し出された。こんな怪しいもの、飲めるわけがない。もしかしたら毒かもしれないんだし。

「信用できないか？」

「当り前じゃない」

タクトは私に試験官を握らせると、背中を向けた。

「飲まないなら、あと五時間程度そのままの状態でいるだけだ。俺は仕事に行く。言っておくが、ベッドから絶対に動くなよ？」

「――待って」

「何だ」

「動けるようになったら……私はどうなるの？」

タクトが振り返る。

「まずは、お前の部屋に案内する」

「私の部屋？」

「言っただろう。お前はこれから、ここの研究員になるんだ。住む部屋が必要だろう」

勝手に研究所に入れられて、住む部屋も用意されている……。本当に一体、何がどうなってるっていうの？

2

「――分かった。飲むわ、この薬」
試験管の液体を見つめると、一度タクトに視線を送り、中身を飲み干した。徐々に足が軽くなっていくような感覚が広がる。これなら立ちあがれるようになりそうだ。

足の感覚が戻ってくると、ゆっくりとベッドから足を下ろした。
「……付いて来い」
私はベッドから立ち上がり、タクトの後ろに歩み寄った。

まだ謎だらけだし、信用するつもりも全くない。けど今は、現状をできるだけ把握しておかなくちゃ。どうやってここに連れてこられたのか、ここがどんな施設なのか、組織とは何なのか、ザックがどうなったのか、リンとの関係性はあるのか。

そして――どうすれば、ここから逃げられるのか。全てを知らなくちゃいけない。こうなってしまった現実を嘆くよりも先に……。

部屋を出た先には、広い廊下があった。ドアがいくつか見えるけど、人の姿はない。廊下をまっすぐ歩くと、あるドアの前でタクトが立ち止まった。

「ここがお前の部屋だ」
ドアの横には、カードキーの挿入口とインターフォンがある。タクトがカードキーを入れると、カチャッとロックの外れる音がした。

中はベッド、テーブル、チェスト、小さな冷蔵庫などの設備が整

ったワンルームで、寮のような作りだった。床にはカーペットまで敷いてある。

「今日からこの部屋で生活してもらう。まぁほとんどの時間は実験室にこもることになるだろうけどな」

私は研究のために誘拐されたってこと？　そう尋ねると、タクトは首を横に振った。

「そういうわけじゃない。誘拐した人間が研究に使えそうな人間だった、だから研究所に入れた……とでも言うのか」

ベッドの上に、私のバッグがポツンと置かれている。その隣にはクロルチル製薬会社の社員証が置いてあった。

3

「あなたたち、ホントに私を殺すつもりはないの？」
「そうだな。お前が研究に使えれば、殺されることはないだろう」
そういえば、さっきナタリーがそんなようなことを言いかけてたっけ。

「つまり、私があなたたちの言う研究ってのに協力すればいいのよね……。分かったわ」
「……さっきまでの態度とは大違いだな」
「叫んでも喚いても無駄なんでしょう？　だったら、いつまでも泣いてるわけにはいかないじゃない。死にたくないもの」

そう、リンの死にこの組織が関わっているのかどうか知るまでは。私はそのために、これまで調査をしてきたんだし。それにもしリンを殺したのがこの組織の人間だとしたら、犯人に復讐できるかもしれない。

「まぁとにかく、大人しく従うのが身のためだ。特にナタリーは……研究のことしか頭にないからな」
タクトは再びカードキーを入れてドアをロックした。オートロックではないらしい。

「俺の部屋は隣にある。さらにその隣がナタリーの部屋だ。ナタリーの部屋を超えて廊下を曲がった先にはエレベーターがあるが、そこには絶対に近付くな」
「……近付いたらどうなるの？」

タクトは廊下の奥を見つめた。
「エレベーターには認証システムがある。この研究所の人間しか使えない。ＩＤ登録されていないお前がエレベーターに乗り込めば、エラーが発生して攻撃される。死にたくなければ言うとおりにすることだ」

エレベーターを使えば、何とか隙をついて逃げ出すことができるかもしれないと思ったけど……。そんなシステムがあるなら絶対に無理だ。

「もし何か聞きたいことがあれば、俺かナタリーの部屋に来い」
「聞きたいことなんて、山ほどあるわよ。今すぐ答えてもらうわ」
そのとき、二つ隣の部屋のドアが開きナタリーが出てきた。

1

「何してんの？　説明が終わったら、早く仕事に戻ってよね」
「いや、まだ話は終わってない」
「ふーん。これから新薬の第一に入るんだけど、人手が欲しいんだよ。タクト、話が終わったら来てくれない？」

ナタリーはタクトに寄り添うと、服の上からでも分かる大きな胸を、タクトの腕にグッと押し付けた。白衣の下のVネックから、目のやり場に困るような谷間が覗いている。

「……他のチームの助手に協力してもらってくれ」
「――チッ。相変わらずツレないオトコだね」

タクトから離れたナタリーは、白衣のポケットから液体の入った小ビンを取り出した。それに軽くキスをして、タクトに手渡す。
「それじゃ」
私の横を通り過ぎ、ナタリーは廊下の奥へと消えていった。

「ねぇ、彼女が言ってた『新薬の第一』って何のこと？」
「ナタリーが作った新しい薬のサンプルを試す、第一段階の実験のことだ。こいつはサンプルの一部だろう」
さっき渡された小ビンに付いた赤いルージュを手で拭うと、タクトはそれをポケットにしまった。

「あの人は――ここでは何の研究をしているの？　新薬って一体……」
「それについては、まだお前に話す段階ではない」

「じゃあ、あなたがさっき受け取った小ビン。あれは何の薬なの？」

するとタクトは「さぁな」と誤魔化した。何にしろ、ロクな薬じゃないだろう。私の足を動けなくするような薬を作った女のものなんだし。

「立ち話では何だ。さっきの実験室に戻ろう」

歩き出したタクトの後ろ姿に続く。タクトやナタリーの様子、誘拐・監禁されている私、人体に害を及ぼすような薬の研究。どう考えても、「普通」の研究施設じゃないわね……。

実験室に戻ってくるとタクトに促され、中央のテーブルの周りに並んでいる椅子の一つに座った。タクトはナタリーから受け取った小ビンを取り出し、中身をじっと見つめている。少し青みがかった、透明の液体だった。

2

「ねぇ。あなたたちはどうやって、私をここに連れてきたの？」
「お前は自分で運転して、この研究所に来たんだ」
「何ですって？」

私自身で運転して、ここまで来た？　そんなことって……。あのときは突然まぶたが重くなって、そのあと頭が痺れたようになった……。それから気を失ったんじゃなかったの？

「その症状は、この研究所で作られた薬によるものだ。その薬を吸い込むと、一部の人間にのみ作用する」
「一部って……どういう意味？」
「あの薬は脳に影響を及ぼす薬なんだが、まだ研究段階なんだ。ほとんどの人間には効果がない」
じゃあ私は偶然、その薬が効いたってこと……？

「どういう薬なの？」
「薬によって影響を及ぼされた脳にだけ作用する、一種の電磁波のようなものを発信するんだ。すると薬が効いた人間は、夢遊病のように無意識の中で発信源にやってくる」
そんな薬を作ることができるなんて。

「つい最近、第三段階の完成となったものなんだが、ほとんど成果が出ていない。成功例は、お前を含めてまだ六件だけだ」
私を含めて六件……。そこでザックの言っていたことを思い出した。行方不明者の数だ。リンを含めて五人と言っていたけど、まさか――。

「私以外の五人って、どうなったの……？」
「それも、まだお前の知る段階じゃない」
「じゃあザックは？　私の助手席に乗ってた男の子。彼はどうなったの？」
小ビンをテーブルに置き、私を見下ろすタクト。

「一緒にいた男性には、効果が表れていなかった。ただ意識を失っていただけで、数時間で目を覚ましているだろう」
「だろう、って……。あなたが私とザックを別々の部屋に移したんじゃないの？」
するとタクトは「いや」と否定した。

「俺はお前を研究に加担させるよう言われただけだ。一緒にいた男性は、別のチームの研究員が引き取っていっただろう」
「……そこで、どうなるのよ」
タクトは溜め息をつくと、また「さぁな」と首をひねった。

3

「嘘よ！　どうなるか知らないわけないでしょ？　同じ組織の人間なのに」

テーブルを挟んで立つタクトを睨みつける。

「この研究所に監禁して働かせるために、変な薬を使って人を集めようとしてるの？」

尋ねると、タクトは「いや」と首を横に振った。

「ただ薬の効果を試す実験を深夜に行っただけだ。だが思いのほか成果が出なかったし、また一から研究し直しになるだろう。まぁこれは俺の管轄ではないし、まだ詳しいことは聞いてないけどな」

イマイチ意図が分からない。そんな薬を使って、一体何をしようとしているのか。でも一つ言えるのは、リンも私と同じように薬が作用して、ここに来てしまったかもしれないということだ。

一ヶ月くらい経って何とか逃げ出すことができたけど、組織の人間に口封じとして殺されてしまった……。そんな仮説が立てられそうだ。もしかしたらこの組織は仇なのかもしれない。

「私はこれから、何の研究をするの？」

「最初は主に、俺やナタリーの研究の手伝いだな。場合によっては、新薬の開発を任せるかもしれない。それはお前の能力を見てからということになるだろう」

こちらに背を向け、壁際の棚に向かうタクト。

「あなたはともかく、ナタリーって女性は私のことをかなり嫌っているみたいだけど。大丈夫なの？」
背中に問いかけると、「気にするな」と返ってきた。

「ナタリーは基本的に、誰に対してもあんな感じだからな。……それより何か飲むか？　ここへ来てから、もうすぐ十時間経つ。喉も渇くだろう」
部屋の隅にある棚から、タクトはカップを二つ取り出した。

「誘拐・監禁しておきながら、随分と待遇がいいのね。ナタリーさんは誘拐犯って感じだったけど。私の顔にメスを当てたりして」
コーヒーを準備をしているタクトの背中を見つめる。

「まぁ時間が経てば、ナタリーの態度も多少は変わるだろう」
「あの人、あなたの恋人？」
インスタントのコーヒーを淹れたタクトは、振り返りざまに「いや」と答えた。
「ナタリーはただの研究仲間だ」

コーヒーを手渡される。でも口を付けることなく、じっと中身を見つめた。
「……安心しろ。毒なんか入れちゃいない」
タクトは私の考えを見透かしているようだった。

1

「他の人たちはどこにいるの？」
「このフロアには俺とナタリー、あとはお前だけだ。他の階には別のチームがそれぞれ配置されている」
タクトはテーブルにもたれながら、コーヒーを冷ますように息を吹きかけた。
「各チームでやってることが違うからな。俺たちは俺たちに与えられた仕事をするだけだ。お前もな」
詳しいことは何も分からないけど、タクトに敵意はなさそうだし……。取りあえずはタクトの言うとおりにしておくのが無難だろう。
「今日は部屋で休んで、明日から働いてもらうことにする。短時間で三つの薬が作用しているからな。しかも一つは脳に直接、影響を及ぼすタイプのもの。しっかり睡眠をとらないと身体に悪い」
コーヒーを飲みながら、タクトは視線を横に流した。
「……優しいのね」
「勘違いするな。働くには健康でいてもらわないといけない。ただそれだけのことだ」
タクトはコーヒーカップをテーブルに置くと、さっき使っていたカードキーを差し出した。
「お前の部屋のキーだ。それを飲んだら、部屋で休むんだな」
カードを受け取ると、私はコーヒーを口にした。濃いめに淹れら

れたコーヒーが、身体の中に染み込んでいく。

「コーヒー、美味しかったわ。ごちそうさま」

立ち上がり、タクトに飲み終わったカップを渡した。軽く見上げるほどの長身だ。

「それじゃ、部屋に行くわ」

ドアを出て、さっき案内された部屋の前に行き、カードキーを挿入した。部屋に入り、内側からロックをかける。私はすぐ、部屋の中をいろいろ調べてみることにした。

まず、バッグの中身。社員証が外に出されていたものの、後のものは全て無事な様子で中に入っていた。携帯も残っている。

携帯の画面を見ると、圏外になっていた。部屋の中をウロウロしてみたけど、電波が届くところはないみたいだ。まぁ電波が届くようなところにいるなら、携帯なんて没収されるに決まってるか……。

2

それにしても携帯が圏外ってことは、研究所内に電波が入らないようにされているのかもしれない。それか、ここが地下にあるかってことになるわね……。部屋に窓はないし、壁もかなり厚そうだ。簡単に逃げられないようにしてあるのかしら。

テーブルの上にはティッシュやポットが置いてある。チェストの中にはタオルなどの生活用品、小さな冷蔵庫の中にはお茶やコーヒーなどが入っていた。その上には小さなトレイが置いてあり、コップが五つ乗せてある。

キッチンがないってことは、食事はどうするんだろう。食堂か何かあるのかしら。かなり狭いけど、トイレとお風呂もある。小さい洗濯機があるけど、着替えはないし……。これもどうするんだろう。

部屋の中を隅から隅まで細かく見てみたけど、監視されている様子はないし、特に怪しいところも見当たらない。

狭いとはいえ、本当に普通のワンルームって感じだ。むしろ監禁されている身にしては贅沢すぎるくらいの部屋。

取りあえず、現状を整理してみよう。ここは怪しい薬を開発してる研究所で、その目的は不明。私はこの研究所で作られた薬の効果によって暗示のようなものにかかり、自らここにやってきた。そこでタクト、ナタリーという研究員に出会う。

ザックはどこか別のチームに引き取られた。リンも私と同じような状況で、この研究所に来た可能性がある。私はこれから研究員としてここに監禁され働くことになった。こんなところか。

逃げ出すのは簡単じゃなさそうだし、奴らに協力的な態度を示しながら、少しずつ逃げる方法を考えた方がよさそうね……。ヘタに反抗するのは危険だし。

ベッドに横になってみる。壁にかかっている時計は、午前十時を示していた。横になったら、何だか急に眠気が襲ってきた。今までの疲れが出たのかもしれない。

今はまだ考えてもどうしようもないことが多いし、とにかくひと眠りしよう。私は目を閉じ、眠りについた。

3

「――ちょっと、聞こえてんの！？」
怒鳴るような声と、ドアをたたく音で目が覚めた。慌ててベッドから降り、ドアのロックを解除する。ドアの前には、ナタリーが苛立った様子で立っていた。

「……何ですか？」
「アンタの服を持ってきてやったのよ。ホラ」
ナタリーはたたまれた服を押し付けてきた。白いシャツに黒いズボン、白衣の三点セットだ。

「明日からはそれを着て仕事すんの。足手まといになんないでよね」
ふん、といった様子でナタリーは顔をそらした。

「あの。あなたはここで、どんな仕事をしてるの？」
「タクトに聞いたんじゃないの？」
「何かの薬を作ってるってことしか聞いてないから。私も研究に加わるんでしょ？　いろいろ知っておく権利はあるはずよ」

ナタリーは「めんどくせー女」と呟くと、ドアにもたれかかって腕組みした。
「アタシは自分の興味ある研究をしてるだけ。上からの命令には従うけど、研究自体は全部アタシの趣味みたいなモンなの」
彼女の言う「上」というのは、きっと組織の偉い人のことだろう。

「あなたの趣味って一体……？」
「アンタなんかに教えてやるほど、アタシは甘い女じゃねーよ」

嫌な女。危害を加えられないだけマシだけど……。

「タクトさんは何だかんだ言いながら、敵意はなさそうだった。でもあなたは違うのね？」

「まぁそうだね。アタシはアンタがこうして研究チームに加わることも反対だったし。アンタみたいな軟派女が嫌いっていうのもあるけどさ」

軟派女って……。言い返したくなる気持ちをぐっと堪えた。

「フリルのミニスカートにふわふわしたロングヘアの『女の子』って感じなヤツ、アタシには合わないんだよ。悔しかったら毒薬の一つでも作ってみな」

そう言い残し、ナタリーは自分の部屋の方へ去っていった。

「毒薬……か」

微かにタバコの匂いのする服を見ながら呟く。やっぱりこの研究所では、ヤバイ研究をしているに違いない――。

1

中に戻って時計を見ると、夕方の四時だった。明日は何時から仕事とか言われてないけど、ここにいればタクトかナタリーが呼びに来るだろう。

そんなことを思っているうちに、お腹が空いているのに気付いた。そういえばもう二十時間近く、食べ物を口にしてなかったっけ……。

ベッドに服を置くと、部屋を出て廊下を見渡した。相変わらず人の気配はない。もし勝手に歩き回ってるところを誰かに見つかって、何かされても困るし……大人しくタクトに訊きにいくか。私は隣の部屋まで行くと、ドアの前でインターフォンを押した。

「――何だ」

出てきたタクトに、食事のことを尋ねてみた。

「フロアの隅に、食堂と売店がある。そこを使うんだ。場所は――」

慌てて「ちょっと」と話を止めた。

「そんなこと言われたって、私は誘拐された身よ？　お金なんて財布に入ってるだけしかないわ。それじゃ、すぐになくなっちゃうじゃない」

「金の心配はいらん。全部タダだ」

監禁されているというのに、全て無料で使えるということ？

「……あなたたち、本当に何を企んでるの？」

私の問いの意味が分からなかったようで、タクトは首を傾げた。

「確かに最初は怪しい薬を使われたり、二度とここから出られないと言われたり、脅しをかけてきたけど……。

フタを開けてみれば家具や必需品の揃ったワンルームが用意されていたり、身体を休めるように言ったり、タダで食堂や売店が使えるなんて。どう考えても不自然じゃない。これが誘拐犯のすることなの？」

「クロルチル製薬会社は、世界最大のシェアを誇っている。それに研究チームには、世界的な化学賞を受賞している人間が多くいることでも有名だ。そのクロルチルの人間が入れば、新しい戦力になるかもしれない。そう思われているんだ」

タクトは目を細めると、私から顔をそらした。

「今のところ、ここの研究員と同じ待遇になってはいる。だがお前に凡人程度の頭脳しかなかったり、協力する姿勢がなければ、この待遇も変わるだろうな」

2

どうやら私は、相当な期待を持たれているらしい。確かにクロルチルの技術開発は世界最高レベルだし、私も薬学にはそれなりの知識を持ってるけど……。

「けどな……ここでの生活、ここでの仕事を考えれば、この程度の待遇では割に合わないと思うようになるだろう。少なくとも、お前のように『普通』の人間には」

その言葉の意図が上手く伝わってこなかった。

「どういう意味？」

「いずれ分かるだろう」

タクトの目は、それまでになく暗いものに見えた。

「――腹が減ってるんだろ？　食堂はこの廊下を真っ直ぐ行って、突き当たりを左に曲がった正面だ」

「食堂っていうくらいだし、他の研究員たちも出入りしてるんでしょ？」

組織の人間じゃない私が、一人で出入りして大丈夫なのだろうか。

「お前が一人でうろついていても問題はない。このフロアには俺たちしかいないと言っただろう。大丈夫だ、行けば分かる」

何だかよく分からないけど、一人で歩いていても平気みたいだ。

ドアが閉まると、言われた通りの道を歩いて食堂に出た。食堂といっても、私が案内されたワンルームより少し広いくらいだ。中に

は自販機のようなものと、小さめの四人掛けテーブルが三卓置いてあるだけ。

自販機のボタンには、食事のメニューが書かれていた。横にはドアのようなものが付いていて、取り出し口と書かれている。

多分メニューを押すとどこかで食事が作られて、それが取り出し口に届くような仕組みなんだと思う。他の階も同じようなシステムで、食事専用エレベーターみたいなものなのかな、と思った。

私はメニューからミートソーススパゲティのボタンを選んで押した。すると取り出し口の上に付いていたランプが光った。そのうち届くだろう。食事が届くのを待つ間、食堂の奥にある自販機の並んだ一角に歩み寄った。

3

全部で三台並んでいる自販機のボタンには、歯ブラシやタオル、シャンプーやボディーソープ、化粧品類などが書かれていた。

タクトの言っていた「売店」って、これのことだったのか……。こっちも食事と同じく、横に取り出し口が付いている。

自販機の項目を眺めていると、ピーという音が聞こえた。食事が届いたらしく、取り出し口のランプが点滅している。

食事の取り出し口まで戻ると、取っ手を引いた。中にはトレイに乗せられたミートソーススパゲティとフォーク、ご丁寧にグラスのお水まで置かれている。ホントに何なの、この研究所は……。

取り出し口からトレイを出すと、テーブルについてスパゲティを口に運んだ。不味くはない、けど特別に美味しいというわけでもない……「普通」という言葉がピッタリの味。

食べ終わった食器は取り出し口に戻して、返却ボタンを押すようにと書かれている。そのようにして食器を片付けると、私は自分の部屋に戻ってきた。

取りあえず着ていた服を脱ぎ、洗濯機に入れてスイッチを押す。シャワーを浴びてバスタオルを羽織ると、洗面台に置いてあったドライヤーで髪を乾かした。

……何だか本当に、普通に生活してるのと変わらない。監禁され

てるという事実を忘れそうな感じだ。

この部屋にはテレビやラジオがなく、外部の情報を得られる手段がない。私がここに来たときのこととか、いざというときのために日記を付けておくことにしよう。

でも部屋には書く物がないし、携帯じゃすぐに充電が切れちゃうし……。そういえばさっきの売店の自販機に、ノートとペンがあったような気がする。着ていた服は洗濯してしまったし、仕方なく白衣を羽織って廊下に出た。

食堂に行くと、そこにはナタリーの姿があった。でもさっきまでと違い、私服らしき服装――迷彩柄の半袖ロングTシャツにタイトなジーンズ――で食事をしていた。

1

「何？　白衣なんか羽織っちゃって。ヤル気満々って感じだね。ハラ括った？」
「別に……これしか着るものがないだけよ」
チキンステーキを頬張っているナタリーの横を通り、自販機にあるノートとペンのボタンを押した。

「今はオフなの？　その服装」
品物を待つ間、ナタリーの背中に問いかけた。
「そうだけど？　今日の仕事はもう終わったし」
「今日はどんな実験をしてたの？」

すると、ナタリーは振り返って私を見た。
「アンタ、ここに監禁されてる身だよ？　あんまり余計なことに首を突っ込むんじゃないよ」
「……じゃあ仕事と関係ない話ならいい？　あなた、今はオフなんでしょ？」

質問に対する答えはなく、白々しい溜め息をつかれた。
「ホントめんどくせーな。だから女は嫌いなんだよ」
「人と話すのが嫌なの？」

ナタリーは顔の向きを戻すと、食事を再開した。
「女はすぐガタガタ抜かすからね。キャーキャーと耳障りな声で騒いだりさ。そういうの、鬱陶しいから嫌いなんだよ」

取り出し口がピーという音を立てた。ノートとペンが届いたよう

だ。取り出し口を開けて中身を取り出すと、私はナタリーのテーブルに歩み寄った。

「……何だよ」

「私も、あなたのような人は苦手よ」

「……何？」

ナタリーの眉間にシワが寄る。

「私は人間味のある、優しい人が好きなの。あなたは研究のことしか頭にないって、タクトさんが言ってたわ」

「人間味ねぇ……」

一転、ナタリーは歪んだ笑みを浮かべた。

「言っとくけど、ここには人間味のあるヤツなんていないよ。つーか人間味のある優しいヤツが、人を監禁するわけないだろ？」

「まぁ、それはそうかもしれないけど……。少なくとも、タクトさんは悪い人じゃないと思った」

「どーだかね」

ナタリーは不機嫌そうに、サッと髪を掻き上げた。

2

「簡単にコワレテくれるなよ？」

その言葉を聞いた途端、身体が凍りついた。ナタリーから発せられた暗く冷たい声が、身体にまとわりつくような感覚。得体の知れない恐怖のようなもの。

私が固まっている間に、ナタリーは食堂から出ていってしまった。胸に手を当てて、大きく息を吐く。やっぱりあの人には、何か危険なモノを感じる。「普通」じゃない、何か……。

部屋に戻ると、テーブルにノートを広げた。そして壁の時計に目をやる。デジタル時計に日付と曜日が表示されていて良かった。今日は六月三日。ザックと家を出た日で間違いなかった。

ノートには今日の出来事――ザックの家を出てからここに来るまでのこと、タクトとナタリーのこと、この研究所について少しだけ分かったこと、リンの行方不明と関係があるかもしれないということなどを書き込んだ。

『今はまだ動きが取れないけど、ちゃんと家に帰れますように』

最後にそう書き込むと、静かにノートを閉じた。明日からどんな仕事が待ち受けているか分からない。今日はもう寝て、明日に備えよう。

私は白衣を脱ぐと、チェストの中に入っていたローブに身を包み、ベッドに入った。あまり眠気はないけど、じっと目を閉じる。明日

から起こる事態に不安を感じながら――。

＋＋＋＋＋

目が覚めたのは、翌朝の七時半頃だった。ボーっと部屋の中を眺め、自分が監禁されていることはやっぱり現実なんだと実感させられる。

ベッドから起き上がると、バッグから化粧ポーチを取り出し、メイクをすることにした。監禁されているとはいえ、身だしなみくらいちゃんとしておかないと。

一通りのメイクが出来上がる頃、インターフォンが鳴った。立ち上がってドアを開けると、白衣姿のタクトが立っていた。

3

「これから仕事だ。準備ができたら、昨日の実験室まで来い」
「分かったわ。そういえばここって外にインターフォンが付いてるのに、中には確認できるモニターがないのね」
「ここには俺とナタリーしかいないから必要ないんだ」

無愛想に答えると、タクトは実験室の方へ去っていった。私も中に戻り、白衣に着替える。洗面台の前で長い髪を後ろに束ねると、鏡の中の自分に向かって「よし」と呟いた。何があっても頑張ろう。生きて帰るために。リンとザックのために。

実験室に行くと、タクトとナタリーがいた。タクトはバインダーを傍らに顕微鏡を覗いていて、ナタリーは部屋の隅の実験台でたくさんの試験管を順に眺めている。

「あの……」
声をかけると、タクトは顕微鏡から目を離して私を見た。
「来たか。早速だが仕事に取りかかってもらう」

タクトは立ち上がり、自分が座っていた椅子に私を座らせた。どうやら最初の仕事は、タクトがやっていた作業の続きらしい。簡単に説明を受け、私は作業に移った。

タクトが実験室から出ていき、ナタリーと二人きりになる。正直ナタリーと二人きりの状態は嫌だけど、私は私に与えられた仕事に集中しなくちゃ。

タクトに任された仕事は、クロルチルの研究でやっている開発の知識で十分対応できるものだった。特に難しいことや、分からないこともない。

集中して進めていき、作業は二時間ほどで終わった。タクトは戻ってきてないし、このあとのことはナタリーに訊いた方がいいのかしら。そんなことを思っていると、ナタリーが実験室を出ていこうとした。

「あの、ナタリーさん」

「何？」

「タクトさんに与えられた仕事、終わったんだけど。これからどうすればいいの？」

ナタリーはドアの前で振り返ると、「タクトに聞いて」と言い残して出ていってしまった。

1

「……何よ。いないから訊いてるのに」

私は立ち上がると、ナタリーが作業していた台の前に立った。たくさんあった試験管は全てナタリーが持っていってしまって、台の上は片付いている。

台の下には抽斗が付いていた。誰もいない今、この研究所に関して探りを入れるチャンスかもしれない。抽斗を開けると、たくさんのA四ファイルが入っていた。

一番手前に並んでいたものを取り出して開いてみると、そこには『人間の足の動きを止める薬品バシクル・バージョン8（完全版）』という見出しがあった。これってもしかして、私が目覚めたときに使われていたもの？

『両足の動きを十五時間ほど停止する。手を使って移動しようとした場合など、足がその場から動かされると振動が伝わり、足の細胞が壊死していく作用』

それじゃあもし、あのときベッドから無理に動こうとしていたら……今頃、私の足は壊死していたということ？

『バージョン8ではバシクルが作用するまでの時間の短縮化に成功。また同時間内に壊死する範囲の拡大も確認された。このバージョンをもって本薬品を完全版とし、研究を終了する』

壊死する範囲の拡大……。何のために、こんな薬を作っているん

だろう。私がさっきやった作業は、こんなヤバイ薬品とは無関係のことだったけど……。このままだといずれ、私もこんなヤバイ薬の研究に――。

「何をしてる」

「――！」

振り返ると、ドアが開いてタクトが立っていた。慌ててファイルを閉じたけど、当然タクトにはバレている。読むのに夢中になって、ドアが開くのに気付かなかった。

「貸せ」

タクトは私からファイルを奪い取ると、中を確認した。

「ごめんなさい。作業が終わったから暇になって、つい……」

「勝手に部屋の中のモノを触るな。立場をわきまえろ」

ファイルを抽斗に戻すと、タクトは私が作業していたテーブルに歩み寄り、データをチェックした。

2

「次はパソコンで、これを報告書としてまとめてもらう。報告書のサンプルを出すから、それを見て作れ」
説明しながら、パソコンスペースに向かうタクト。私はその後ろ姿に問いかけた。

「ナタリーさんが危険な薬を開発してるってことは、昨日も聞いたけど……。タクトさんは何の研究をしてるの？」
「危険な薬、か……」
パソコンに書面が開かれると、タクトは振り返った。

「ここで作られている薬に、本当の意味で安全なモノなどない。たとえそれが解毒剤だったとしてもな」
「つまりタクトさんも、ナタリーさんと同じように危険な薬を作ってるってことなのね」
「……わざわざ『さん』付けで呼ばなくていい」

私はタクトと入れ替わるように、パソコンの前に座った。パソコン画面には報告書のサンプルが写し出されている。

「これが終わったら、休憩を取っていろ。食堂に行って飯を食うなり、部屋で休むなり好きにしていて構わない。次の指示はまた俺から出す。念のために言っておくが、実験室内の抽斗を勝手に開けるなよ」

威圧的な視線を送られ、素直に頷いた。
「分かったわ。……タクト」
タクトは特に言葉を発することなく、実験室から出ていった。

それにしても、あまり迂闊な行動に出ると危険かもしれない。さっきはタクトだったから良かったものの、あれがナタリーだったら何をされていたか分からないし。なるべく慎重に、内部のことを探らないと。小さく溜め息をつくと、私はパソコンに向かって作業を開始した。

＋＋＋＋＋

作業を終えたのは午後一時前だった。パソコンの電源を切り、軽く伸びをする。終わったら休憩していいって言っていたし、お昼ご飯を食べに行くか……。

実験室から出て食堂に行くと、タクトもナタリーもいなかった。食事の時間に二人と一緒にはなりたくないし、少しだけ安心する。一人で静かに食事を進め、食べ終わると食器を片付けた。

3

食堂を出て廊下を歩いていると、入ったことのない実験室からタクトが出てきた。
「休憩は取ったのか？」
「えぇ。ちょうど今、食事を済ませてきたところよ」
「それじゃあ次の指示を出す。実験室に戻るぞ」
相変わらず無愛想な口調だ。

「他の実験室ではどんなことをしてるの？」
実験室に戻る廊下を歩きながら、並ぶドアを順に見ていく。ドアの外の札には実験室Ｄ・実験室Ｅなどと書かれているだけで、中で何をしているかのヒントになるようなことは書かれていない。

「今のお前には関係ない」
前を歩くタクトが振り向くことなく言う。
「やっぱり詳しいことを教えるつもりはないのね。協力させてるくせに」

いつもの実験室の前に着く。ちなみにここは実験室Ａだ。使用頻度が高く、中心となっている実験室なのかもしれない。タクトと一緒に実験室に入ると、次の仕事の説明を受けた。

パソコンに向かって作業を開始する。タクトは中央の広いテーブルで、山積みのファイルから一つを開いて眺め始めた。中に何が書かれているのかまでは、遠くて見ることができない。

しばらくパソコンに向かっていたものの、少し目が疲れてきた。目を休ませるついでに、タクトの方を向く。

タクトは相変わらずファイルを開いては閉じ、時々何かを書き込んだりする作業を繰り返していた。でも私の視線に気付いたのか、手を止めて顔を上げた。

「どうした」

「目が疲れたから、少し休めてたの。ごめんなさい。すぐ再開するわ」

「気晴らしにコーヒーでも飲んだらどうだ。そこに必要なものは揃っている。勝手に使って構わない」

「……じゃあそうさせてもらうわ」

立ち上がると、昨日タクトがコーヒーを淹れていたポットの前に立った。台の上には、コーヒーの粉や紅茶パックの入った缶が並んでいる。カップは戸棚の一番上だ。背伸びしても届かず、タクトに声をかけた。

1

「悪いけど、カップを取ってもらえないかしら」
タクトは無言で立ち上がると、私の隣に立った。手を伸ばし、カップを取る。
「せっかくだし、あなたの分も淹れるわ。もう一つ取って」

棚の上に手を伸ばすタクトの横顔を見る。混乱の中であまりしっかり見たことがなかったけど、こうして見るとすごく綺麗な顔をしていた。つやのある肌にサラサラの髪、透き通るようなグリーンの瞳。カッコいいな……と思う。

タクトにカップを手渡されると、彼の瞳をじっと見た。
「――信じられない」
「何がだ」
「あなたのような人が誘拐・監禁したり、怪しい薬を作ったりしている組織の人間だなんて」

すると突然、タクトは台にバンッと手をついた。私の視線と同じ高さに顔を近付ける。
「昨日も言ったが、勘違いするな」
「あ、あの……」
鋭い視線を向けられ、私は怯んだ。

「――何してんの？」
声のした方を見ると、ファイルを抱えたナタリーが実験室に入ってきていた。目を細めながら、私たちの方に歩み寄ってくる。

「二人仲良くコーヒーを淹れてたってワケ。タクト、こういう女が好みだったの？」
　ナタリーは黙っているタクトの白衣のポケットに、昨日と同じ形の小ビンを入れた。
「女に興味なさそうな顔してたくせに意外」
「……変な誤解をするな、ナタリー」
　タクトは私からカップを奪うように取ると、自らコーヒーを淹れ始めた。
「愛想のないオトコ。研究しか興味がないのは、アンタだって同じのくせに」
「何の話だ」
「アタシのこと、この女にそう言ったんでしょ？」
　ナタリーが横目で私を見た。
「仕事でもオフでも関係なく、常に白衣しか着ないタクトなんかより、アタシはずっと『健全なオンナ』だと思うけどね」
　その言葉にタクトは一瞬、手を止めた。でもすぐに、ポットのお湯をカップに注ぎだした。

2

「ここにいる以上、研究に明け暮れるのは普通のことだ」
「あっそ。少しくらいは女遊びすればいいのに。割と良い顔してんだからさ」
「余計な世話だ」
「もしかして、二十七にもなってチェリーボーイ？」
そんなことを口走るナタリーにも、タクトは動じる様子なくコーヒーを口にした。

「変な心配をする暇があったら、昨日の『第一』の結果でもまとめといてくれ」
「……はいはい。分かったよ」
嫌味っぽく言ったナタリーは、持っていたファイルを抽斗にしまって、実験室から出ていった。

「ねぇ、この研究所には何人くらいの研究員がいるの？」
「どうしてそんなことを訊く？」
「さっきナタリーさんが女遊びって言ってたけど、遊べるほど女性研究員も多いのかな……と思って。クロルチルの研究チームは、女性研究員の割合が少なかったから」
「……」
タクトが黙り込むのを見て、慌てて「やっぱりいいわ」と付け加えた。ナタリーの登場で忘れていたけど、さっきキツイ目をされたばかりだった。
「――研究員は五十人程度、ちなみに女性研究員は二割程度だ。た

くさんいたとしても、女遊びなんてする暇はないけどな」

そう説明しながら、タクトは自分の席に戻って作業を再開し始めた。

「そう……。ありがとう」

私もコーヒーカップを持ってパソコンの前に戻ることにした。

もし全員が研究所内に住んでいるなら、研究員の部屋だけで五十部屋くらいあるということになる。どこも同じ大きさのワンルームだったとしても、それなりに大きい施設なんだろう。

私がいるフロアには三人分の部屋と食堂、そして実験室がAからEまである。実験室の大きさは外側のドアからじゃ分からないけど、ワンフロア自体も結構な広さがありそうだ。

でも人数だけじゃ、建物全体のイメージまで把握できないか……。ナタリーはともかく、タクトから少しずつ情報を引き出していくのが一番だろう。

3

この日の作業を終了していいと告げられたのは、夜の九時過ぎだった。部屋に戻ってシャワーを浴び、私服に着替える。ここには連れ去られてきた日に着ていた服と下着しかないし、洗濯して着回すのも大変だ。

何でもいいから服や下着を調達できる自販機とかないのかな……。でもこれは男性のタクトには訊きにくい。あまり気が進まないけど、ナタリーの部屋に行ってみるか。

先に食事を済ませると、ナタリーの部屋の前まで行き、インターフォンを押した。すると中から、見知らぬ男性が出てきた。

「あれ？　ここってナタリーさんの……」

「そうだよ」

男性は私を見ることなく答えると、廊下を曲がってエレベーターの方へと消えていった。

「何か用？」

部屋の奥から顔を出したナタリーは、ブラジャーにジーンズという格好だった。

「え？　あ、ごめんなさい。着替え中？」

「別にいいけど。何の用なの？」

「あの、ここでは下着とか服の調達はできないのかなと思って」

「……入りな」

ナタリーに促され、部屋の中へと入った。私の部屋はワンルーム

だけど、ナタリーの部屋には奥にドアがもう一つついていて、二部屋あるみたいだった。ベッドがないから、おそらく奥は寝室だろう。

ナタリーはテーブルの上にあったタバコとライターを取ると、タバコを咥えて火を点けた。

「ま、アタシと同じサイズでも着れるでしょ。ちょっと大きいかもしんないけど」

チェストの一番下の抽斗を開けると、ナタリーはバサバサと服を出し始めた。たくさんの服が床に広げられる。

「ここにあるのは全部、新品の服だから。適当に好きなの持ってきな」

「……ありがとう」

テーブル横のソファに腰掛けるナタリー。私は床に座って服を選んだ。上下合わせて三セット。どうせここでしか生活しないんだし、これだけあれば十分だろう。

「これだけいただくわ」

「そ。じゃ、残りの服は元に戻しといて」

言われた通り、綺麗にたたんで残りの服を片付けた。

1

「それで……下着は？」
「下着はアタシと同じサイズじゃ無理でしょ。カップの大きさが違いすぎる」
床に座ったまま、ソファのナタリーを見上げる。確かに彼女の胸は、憧れるほど綺麗で大きかった。何だか悔しいけど。

「……早くシャツか何か着たら？」
「別にいいでしょ。アタシの部屋なんだから」
ナタリーはタバコを揉み消すと、立ち上がって奥の部屋に入っていった。やっぱり中は寝室のようになっている。戻ってきたナタリーの手には、携帯が握られていた。

「携帯、通じるの？」
「コレは組織専用の携帯。あくまで部外者のアンタには関係のないモンだよ」

ナタリーはどこかに電話をし始めた。下着の注文をしているらしい。会話を終えて電話を切ると、ナタリーは私を見下ろした。

「明日にはアンタ用の下着が届くから。それまで待ってな」
「分かった。……ところで、さっき部屋から出てった人は誰なの？」
「他の研究チームのヤツ」
「恋人？」
「まさか。ただのセフレだよ」
「セ――」
あまりにも軽く言われて、私は言葉を失った。

「最近はアイツとのセックスもワンパターン化してきたし、もう関係解消しようかと思ってるけどね。他にも相手はいるし」
ナタリーに対して軽蔑する気持ちが、心の中に広がった。

「……何？　その目。文句あんの？」
「いえ、そういうわけじゃ……」
きつく睨まれ、私は言葉を濁した。

「タクトにも言ったけど、アタシは健全な女だから。研究以外にも、やることはやってるさ」
ドスッとソファに腰掛けるナタリー。
「好きな人とか恋人、いないの？」
ナタリーは首を横に振った。

「そんなの、研究者には必要ないね。オトコなんて、セフレ程度の付き合いで十分だよ」
「……私のことを軟派女って言ったけど、あなたの方がよっぽど軽いじゃない」
「アタシはサバサバしてるだけ。アンタみたいに可愛い女ぶってるのとは違うんだよ」
またタバコを咥え、ナタリーは火を点けた。

2

「ここは女の研究員が少ないし、男の研究員は飢えてるヤツがほとんど。だから研究員の多くは、誰かしらと身体の関係を持ってるんだよ。堅物のタクトは研究一筋みたいだけど。一時はアッチじゃないかって噂があったくらいだからね」

一旦タバコを灰皿に置いたナタリーは、ソファにかけてあったバスタオルを肩に羽織った。

「まぁアタシは女の研究員の中でもいいカラダしてる方だから、わざわざ誰かの気を引かなくても、向こうから勝手に寄ってきてくれるけどさ」

彼女の言っていることは、私には受け入れられなかった。

「……身体を利用されてるだけじゃない。それでいいの？」

「別に構わないよ。ここではそれが普通だから」

「同じ女として寂しい限りだわ」

私の言葉に答えることなく、ナタリーは立ち上がった。

「もう用はないだろ。さっさと出ていきな」

服を抱えてしゃがみ込んでいる私に、ナタリーはタバコの煙を吹きかけてきた。煙を吸い込み、軽く咳き込む。

「ホント、ヤワな女。こんなヤツ引き込んで、邪魔になんなきゃいいけど」

私は黙ってナタリーの部屋を出た。たとえ怪しい組織の一員じゃ

なかったとしても、彼女とは絶対に合わないと思う。好き嫌いとかではなく、彼女と考え方が交わることはないだろう。そんな気がした。

＋＋＋＋＋

翌朝、昨日と同じ時間に実験室に行くと、そこにはタクトがいた。ナタリーの姿はない。
「今日の仕事は？」
「昨日と同じだ。特別に指示がない限り、当面は同じ作業を毎日やってもらう。お前の仕事に対する様子を観察する意味でもな」
「そう。分かったわ」

デスクで昨日と同じ作業をしていると、しばらくしてナタリーが入ってきた。ナタリーは笑みを浮かべていた。
「タクト、『ステルリン・バージョン５』が完成したよ」
「何？」
テーブルで作業していたタクトが立ち上がる。
「実験は？」
「これからやる。結果、楽しみにしてて」
ナタリーは何か薬ができたのを報告に来ただけらしく、すぐに実験室を出ていってしまった。

3

「ねぇ、『ステルリン』って何？」
「今、ナタリーが開発している薬だ」
「そうじゃなくて、どんな効果のある薬なの？」
タクトは溜め息をつきながら、椅子に座った。

「……お前がここに来たときに作用していた、脳に影響する薬。あれに似たものだ」
「人を誘拐するための薬ってこと？」
「そうじゃない。さっさと作業を進めろ」

気になったけど、それ以上は訊かずにおいた。どうせまた「お前の知ることじゃない」とか言われるだろうし。

任された作業をこなすだけの単調な時間をこなし、午後八時には終了していいと告げられた。お腹も空いたことだし、今日は先に食事を済ませよう。

「それじゃあ、また明日」
資料に目を通しているタクトに声をかけ、実験室を出る。――と、急にドアが開いてナタリーが入ってきた。ぶつかりそうになり、慌てて後ずさる。

「実験、終わったよ」
実験……午前中に言っていた、ステルリンって薬品に関することかしら。私は中に入ってきたナタリーを目で追った。

「『バージョン5』にしては、なかなかの成果だった。この調子でいけば、七段階目くらいで完全版となりそうな感じ。『D・H・』がイカれたから、次は――」

するとタクトは「待て、ナタリー」と話を遮った。そして、ドアの前に立ったままの私を見た。

「お前はもう部屋に戻れ」

その言葉にナタリーが反応する。

「別に、コイツに聞かれちゃマズいような話はないけど」

「実験結果の話は、まだコイツには早い」

「そう？　どうせここから出られるわけじゃないし、コイツに何を聞かせようと――」

「あの！」

私は二人の会話に割って入った。

「さっきからコイツ、コイツって……。お前とかアンタとかコイツとか言うけど、私にはリア＝ウェルズって名前があるのよ」

「は？　何よ、偉そうに。アンタなんかコイツで十分でしょ」

ナタリーはキッとこちらを睨みつけてきた。

1

「でも……ほら。ただ誘拐されただけじゃなくて、私も研究チームのメンバーになるようなものだし。お互いに名前で呼んだ方が、慣れやすいと思うの。私はここに連れて来られて、独りぼっちの状態だから」

あくまで協力的な姿勢を示そうと、そう付け加えた。まずは私自身が二人に敵意がないことを証明しなければ、逃げ出す糸口を掴むことも難しいと思うし。

「――分かった。これからは名前で呼ぼう」

タクトが答える。ナタリーは「ホント生意気な女」と言いながら、隣で舌打ちした。

「……それじゃあ、私は戻るわ。また明日」

二人に向かって軽く会釈すると、実験室を出て食堂へと向かった。あの様子から見て、タクトは私を実験室から追い出したいようだった。

ナタリーは気にしていない感じだったけど、タクトから見れば私に聞かれたくない話があったということだろう。

気になるのは、ナタリーが言っていた「D・H・」という言葉。初めて聞く単語だった。よく分からないけど、実験に関わる何かだろう。

今日は組織に関する、新しい情報を得ることもできなかった。で

もこれに関しては、焦っても仕方ないわよね。ヘタに動くことはできないんだし。今後は少しでも動きやすくなるよう、タクトとナタリーの信頼を得なくちゃ。

食事を済ませて部屋に戻ると、ノートを広げて今日のことを書き込んだ。まず自分が行った作業、しばらくは同じ作業を繰り返すように言われたこと。

またナタリーが「ステルリン」という薬品の開発をしているということ、それに関する実験が行われていたということ、「D・H・」という言葉。今日はこんなところか……。

それにしても――このままあの実験室に閉じこもりっぱなしの作業が続くと、欲しい情報はなかなか得られないだろう。

このフロアだけじゃなく、もう少し別の場所を見たり、他の研究員とも会って話したりしてみたい。どこに有力な情報が転がっているか分からないしから。そんなことを考えながら眠りについた。

2

――私の願いも虚しく、実験室にこもりっぱなしで同じ作業の繰り返しが続いた。この研究所に来てから、もう一ヶ月近く経つ。

タクトやナタリーは相変わらず何の仕事をしているか分からないし、私がこのフロアから出る機会もなかった。

一度「バシクル」という薬品についてのファイルを盗み見て以来、実験室には常にタクトかナタリーがいたため、新たな動きを取ることもできなかった。

さすがに一ヶ月近くも経つと、仕事やこの研究所での暮らしにも慣れてきて、タクトやナタリーとの会話も苦にならなくなった。まるで最初からこの研究所にいたかのような……そんな気さえしてくる。

ザックのことも分からないままだけど、この研究所のどこかで雑用係でもさせられているかもしれない。とにかく大人しく奴らに従って、危害を加えられてなければいいけど……。

そんなある朝のことだった。実験室に出向くと、ナタリーが椅子に座ってコーヒーを飲んでいた。いつも私が来る頃には何らかの仕事に取りかかっているのに、のんびり座ってコーヒーを飲んでいるなんて。

「珍しいわね。朝イチで休憩？」

「昨日は深夜までいろいろやることがあったからね」
「もしかして、昨日から今朝まで寝てないの？」
「仮眠は取ったさ。これから大事な実験を控えてるからね。休んでる暇なんかないよ」

ナタリーは飲み終わったカップを流しに置いた。
「大事な実験って……？」
何だか不吉な予感がした。ナタリーが振り返る。

「いい機会だ。アンタを連れてってあげる」
「連れてくって……どこへ？」
「新薬実験専用の実験室さ」
ナタリーは私の前まで歩いてくると、じっと目を見た。

「アンタもそろそろ知っておくべきだと思うからね。ここでやってる実験について」
「――！」
ついに研究所について新しい情報が得られるチャンスが来た。でも私はその興奮を悟られないよう、冷静に「そう」とだけ呟いた。

3

「タクトは『アイツは何を考えているか分からないから、俺が指示するまで絶対に他の箇所に連れていくな』なんて言うけどさ。いつまでも同じ作業ばっかりやらせてないで、さっさと新薬の研究に駆り出せばいいと思ってたんだよね。アンタが何を考えてたって、どうせここから逃げることは不可能なんだから」

ナタリーは歪んだ笑みを浮かべていた。

「勝手に私を連れ出して大丈夫なの？」

「今日は一日中、タクトは上の連中と合流してる。絶対にこのフロアには戻ってこない。連れ出しちまえばこっちのモンさ」

詳しくは分からないけど、別のフロアに行けるのは間違いない。私は大人しく、ナタリーの指示に従うことにした。

「それじゃ、付いてきな」

実験室を出ると、ナタリーの部屋を通り過ぎた廊下の先を曲がった。正面にエレベーターがある。その前に立つと、ナタリーは下へ行くボタンを押した。すぐにエレベーターが到着し、揃って中に乗り込む。

意外と広いエレベーターの中には、ボタンが並んでいた。「Ｂ１」から「Ｂ１７」までのボタンがある。この研究所は地下にあるみたいだ。

現在地は「Ｂ８」。最上階にあたるのが「Ｂ１」になるのかな…

…。とすると、地上一階から外へ繋がっているわけじゃないってこと？

ナタリーはエレベーターに入るとすぐ、ボタン「Ｂ１」の上にある小さな黒いスペースに人差し指をあてた。指紋認証システムらしい。認証が終わると、ナタリーは「Ｂ１５」のボタンを押した。エレベーターが動き出す。

「Ｂ１５」に到着すると、ナタリーの後に続いて歩いた。廊下は私がいたフロアと同じ作りになっていたけど、ドアの数が少ない。

歩きながら見ていくと、真っ直ぐ伸びる廊下には三つしかドアがなかった。エレベーターから一番遠い、三つ目のドアの前でナタリーが立ち止まる。ドアには「新薬用実験室Ａ」と書かれていた。

1

ナタリーがドアを開け、一緒に中に入る。いつもの実験室の倍くらいの広さだ。設備は似たようなものだけど、加えてガラス張りの部屋が隣接していた。

部屋といっても、何もないただの空間。ガラス張りの部屋の前にはテーブルが並んでおり、モニターや資料が置かれている。あの中で実験を行い、前のテーブルで資料をまとめたりするのかもしれない。

中央のテーブルでは二人の男性研究員が何か作業をしていたけど、ナタリーが歩み寄ると手を止めて立ち上がった。

「準備はできてるの？」
「はい。すぐに始めますか？」
「もちろん。『D．H．』を中に入れて」

ナタリーの言葉で、男性研究員二人がガラス張りの部屋の中に入っていった。見ると、ガラス張りの部屋の奥にも一つドアがある。研究員たちはそこに入ってドアを閉じた。

それにしても「D．H．」って――以前タクトが私を追い出そうとしていたときに、ナタリーが言っていた言葉。あれ以来、一度も聞いてなかったけど……。

「――リア」

ナタリーに呼ばれ、我に返った。
「あの、これからやる実験っていうのは？」
「『ステルリン・バージョン6』の効果を見る実験」
それって「D．H．」という言葉を聞いたとき、実験していたっていう……。

「前に実験したと言ってた薬よね？」
確認すると、ナタリーは頷いた。
「前にあなたがその話をしていたあと、タクトに聞いたの。『ステルリン』というのは脳に影響を与える薬だって言ってた。一体どんな影響を――」

言いかけたとき、ガラス張りの部屋の奥についていたドアが開いた。出てきたのは研究員一人だけ。その後ろには知らない男性が一人いる。

その男性はごく普通のカジュアルな格好をしていた。彼を中に残し、研究員が出てくる。ドアにロックをかけると、研究員はナタリーの方を向いた。

2

「ナタリーさん、準備完了です」
「分かった。モニターで脳のチェックをして」
その言葉で、研究員はガラスに面したテーブルについた。ナタリーは私の腕を引っ張ると、研究員の後ろに立たせた。
「アンタは今回、見てるだけでいいよ」
「え、えぇ……」
言われるがまま、ガラスの中に注目する。中にいる男性は、明らかに戸惑った様子で真ん中付近に立っていた。この場にそぐわない雰囲気。まさか、この人――。
「ナタリー。あの人、もしかして誘拐してきたの？」
「アンタと同じだよ。薬によって、ここにやってきたヤツさ」
「……彼に何をするつもり？」
「は？　『ステルリン・バージョン６』の効果を見る実験に決まってるでしょ」
ナタリーは座っている研究員の隣に立つと、テーブルに設置されているマイクに向かって話しかけた。
「スタンバイ」
どうやら、ガラス張りの部屋の奥に声が聞こえているらしい。奥のドアから先程の研究員が出てきた。その手には何故か、包丁が握られている。研究員は持っていた包丁を、戸惑っている男性に無理やり握らせた。男性は怯えた表情をしている。

「ちょっと、彼をどうするつもりなの？」
マイクに向かっているナタリーに問いかけたけど、返事はない。
「『D・H・』のスタンバイOK。入れて」
ナタリーが指示を出すと、また奥のドアが開いた。そこから誰かに押されるような形で、一人の男性が入ってきた。彼も戸惑った顔をしている。
「まさかあの人も――」
その瞬間だった。包丁を持った男性が、入ってきたばかりの男性に襲いかかったのだ。さっきまでの戸惑った様子や怯えた表情が嘘のように、包丁を振りかざしている。入ってきた男性は間一髪で包丁の攻撃を避け、床に転がった。

3

「何!?　どういうこと!?」
中で起きた事態に混乱して、思わずナタリーの腕を掴んだ。
「あの人、何かおかしいわ。早く止めないと!」
「あれが『ステルリン』の効果だよ」
「何ですって!?」

ガラス張りの部屋の中に視線を戻す。狂ったように包丁を振りかざす男性、怯えながら必死の形相で逃げ回る男性。でもどんなに逃げ回ったって、こんなに狭い空間の中ではすぐに捕まってしまう。

「止めないと、あの人は殺されてしまうわ!」
ドアの前に駆け寄り、ロックを外そうとした。でも鍵を使わないといけないタイプのもので、私には開けることができない。

「ナタリー!　早く!」
「黙りな!」
ナタリーに怒鳴られ、私は勢いを失った。――と、そのときガラス張りの部屋から、絶叫のような奇声が聞こえた。反射的に目をやる。

「――!」
逃げ回っていた男性が床に倒れ、その上に包丁を持った男性が馬乗りになった。包丁が倒れている男性に突き刺さり、ガラスに鮮血が飛び散る。

「いやぁぁぁっ！」

悲鳴を上げながら、ドアから離れる。その間にも包丁が振りかざされ、何度も何度も男性に突き刺さった。

肉片のようなものまで飛び散り、吹き出した血が壁や床に撒き散らされていく。何もなかった空間が、あっという間に生々しい赤色に染まった。

「――うっ！」

急激な吐き気が襲ってきて、私は床に崩れた。傍にあったゴミ箱を慌てて引き寄せ、その中に嘔吐する。

「うぐっ……」

訳の分からない涙がこぼれた。何なの？　何がどうなってるの？　どうしてこんな――。

「さすがに『ステルリン』は、アンタには早すぎたか」

頭上でナタリーの声が聞こえた。袖で口元を拭い、顔を上げる。

「カーテンを下ろして」

ナタリーの指示で、モニタリングしていた研究員が「はい」と答えた。何か起動したような音が聞こえると、自動でカーテンが下りてきて、血まみれの部屋は見えなくなった。

1

「……『D・H・』の脳に影響はなさそうです。詳しい結果、出してきていいでしょうか？」

私を横目で見ながら、遠慮がちに尋ねる研究員。

「いつもの通りに頼むよ。コイツはアタシが世話するから」

研究員が一礼して出ていくと、私はナタリーに問いかけた。

「どうして……彼を助けなかったの？」

「それが実験だからさ」

「何が実験よ！　ただの殺人じゃない！」

睨み付けると、ナタリーは腕組みしながら台にもたれかかった。

「『ステルリン』っていうのはね、『対象となった人間を殺す効果』を持つ薬品だ。アンタがここに来たときに使ってた薬と原理は同じ。

簡単に説明すると、包丁を持った男には『ステルリン』が投与されていて、殺された男には『ステルリン』が作用したヤツにだけ分かる電波のようなものが生まれる薬品を投与してあった。あの男はそれに反応して、無意識のうちに発信源を潰そうとしたってワケ。

前回の実験では発信源を潰して我に返ったあと、自分が殺したことを覚えていてね。そいつの精神がイカれちまったんだよ。でも今回は大丈夫そうだね」

対象となった人間を殺す？　私がここに来たときと同じ原理って言うけど、やっていることは単なる殺人の助長にすぎなかった。

……そこでふと思い出す。ナタリーが「D．H．」の話をしたときも、「イカれた」と言っていたことに。もしかして「D．H．」っていうのは――。

「『D．H．』――Ｄｉｓｐｏｓａｂｌｅ　Ｈｕｍａｎ。意味は、『使い捨ての人間』」

ディスポーザブル・ヒューマン……使い捨ての、人間？　ナタリーは私を見下ろしたまま言葉を続けた。

「この研究所では、実験台にマウスやモルモットを使うことはない。どんなにアブナイ薬も、研究の第一段階の薬でも、人に死をもたらす薬でも、全て生身の人間を実験台にしてるのさ。そして実験台になる人間のことを、アタシたちは『D．H．』と呼ぶ」

人間が使い捨ての実験台？　どう考えても狂ってる。

「悪魔どもめ……！」

憎しみを込めて吐き捨てた。

2

「まぁアンタみたいに『普通』の人間からすれば、そう思うのも無理ないかもしれないね。最初に言ったでしょ？　ここには人間味のある優しいヤツなんかいないって」

「……あなたたちの頭こそイカれてる」

頭の中に、激しい憎しみのような感情が流れ込んでくる。

「何とでも言いな。とにかく、『ステルリン・バージョン6』の実験はこれで終わりだよ。あとはさっきの研究員が実験結果を出してくる。そこから先のバージョンアップは、またアタシのシゴトってワケさ。ほら、アンタも自分の仕事に戻るよ」

ナタリーは私の腕を掴んで立たせようとした。それを振り払う。

「私に触らないで」

「警戒？　別に、今更アンタを殺す気はないよ」

「そういう問題じゃないわ」

「……ふん」

ナタリーが身を引くと、自分で立ち上がった。実験室を出るナタリーの後に、無言で付いていく。

廊下を歩く間も、エレベーターの中も、実験室Ａに戻るまでも、私は俯いたまま無言でいた。見たものの衝撃が大きすぎて、何も考えられない。

「タクトが戻らないのをいいことに、サボるんじゃないよ」

ナタリーはそう念押しすると、私を実験室に残して出ていった。パソコンの前に座り、電源の入っていない画面をぼんやりと眺める。

じっとしていると、あの惨劇が頭にフラッシュバックしてきた。身体がガタガタと震えて、頭の中の景色が血の色に染まっていく。私は両腕で、震えの止まらない身体を抱き締めた。

怖いのか、辛いのか、苦しいのか、憎いのか、悲しいのか。訳の分からない感情が込み上げてきて、涙が溢れた。それは、絶望に似た何かかもしれない……。

＋＋＋＋＋

――いつの間にか、デスクに伏せて眠っていた。目をこすりながら、デスクに置かれている時計を見る。午前〇時を回ろうとしていた。もう十時間以上ここに座っていたんだ、私……。

こんな時間まで起こされていないということは、ここに戻ってきてから今まで、タクトもナタリーも顔を出していないんだろう。

3

ゆっくりと立ち上がり、実験室を出た。おぼつかない足取りで部屋に戻り、ベッドに倒れ込む。着替えもお風呂も、何もかもやる気にならなかった。食事なんて、もっての外だ。

服をベッドの下に脱ぎ捨て、下着姿で布団に潜り込む。そういえば誘拐したくせに待遇が良すぎるとタクトに話したとき、こんなことを言われたっけ。

――「ここでの生活、ここでの仕事を考えれば、この程度の待遇では割に合わないと思うようになるだろう。少なくとも、お前のように『普通』の人間には」――

今になって、この言葉の裏側が分かった気がする。確かにいくら普通の生活ができたって、人を殺すような実験をしている研究所に監禁されてるなんて……。

明日から、私はどうしたらいいんだろう。何食わぬ顔して、与えられた仕事を繰り返していけばいい？　またいずれ、あんな悲劇の実験に付き合わされるときが来るの？　拒否したら殺される？　私も「D・H・」として危険な実験に使われる？

いろんな疑問が頭に浮かんでは消えていく。どんなに考えても、何もまとまらないのに。無駄に冴えている思考回路を停止させたくて、私はギュッと目を閉じた。

＋＋＋＋＋

朝の九時を過ぎた頃、インターフォンが鳴った。タクトかナタリーが呼びに来たんだろう。ベッドから起きることなく、返事をすることもなく、その音を無視した。もう一度インターフォンが鳴る。それでも無視し続けていると、音は鳴らなくなった。

きっと、諦めて戻っていったんだと思う。私はベッドの中で、ただ茫然としていた。仕事が嫌だとか、殺されたくないとか、いろんな思いはあるはずなのに。身体を動かすことができなかった。

1

リン……。もしかしてリンもここで、あんな惨劇を見せられたの？　いつも底抜けに明るくて優しいリンが、あんなシーンを目の当たりにしたら――。

きっと、私以上のショックを受けただろう。苦しくて怖くて、独りぼっちで泣いていただろう。それを思うと胸が痛んだ。リンの死と、この研究所が無関係であったらいいのに。心の底からそう願った。

時計が午後四時を指す頃、またインターフォンが鳴った。

「タクトだ」

声がする。

「出てくるつもりがないなら、勝手に入らせてもらうぞ」

部屋に入ってくる？　もしかして、私を殺そうと――。考えているうちにカチャッとロックが解除される音がして、ドアが開いた。

ベッドで上半身を起こし、身構える。もしかしたら凶器を持っているかもしれないと思ったんだ。でもタクトは何も手にしておらず、むしろ入ってくるなり驚いた顔をした。

「……悪い」

ドアの前で、タクトは背を向けた。自分が下着姿のままだったことを思い出す。

「男性に下着姿を見られようと、もうどうでもいいわよ。そんな『

普通』の感情、ここでは無意味だもの……」

呟きながら、布団をギュッと抱き締める。タクトは振り向くと、私の方を見ないように中まで入ってきた。ベッドに背中を向け、床に座り込む。

「俺はマスターキーを持っている。出てこないなら、勝手に部屋に入って連れ出すしかない」

私は言葉を発することなく、タクトの背中を見つめた。

「――昨日のこと、ナタリーに聞いた」

その途端、身体が冷たくなるような感覚がした。

「最初に見た実験が『ステルリン』じゃ、さすがに衝撃が大きすぎただろう」

昨日の情景が頭に浮かんでくるのが怖くて、布団に顔をうずめる。

「ナタリーにはもう一度、リアを指示なしで連れ出すなと念を押しておいた」

念を押そうと何だろうと、もう見てしまったもの。手遅れじゃない、今更……。

2

「実験のせいで酷い衝撃を受け、ショック状態になっているのは分かる。でも――」
「言うことを聞かなければ、私も実験材料にするつもりなんでしょ！？」
叫びながら顔を上げた。押さえていたものが込み上げてきて、涙がボロボロとこぼれる。タクトは顔だけこちらに向けた。
「泣くな。危害を加えるつもりはない」
「そんなの嘘よ！」
怒鳴りつけると、タクトは顔をそらした。
「ここに来てからずっと思ってた。あなたは、あなただけは、悪い人には見えないって。でもあなたも……人間を『モノ』として使い捨てるような実験を、日常的に行ってるんでしょう？」
「……俺も組織の一員だからな。ナタリーと同じ部類の人間だ」
その言葉は何故か、重くのしかかるように感じた。監禁されている身でありながらも、心のどこかでタクトの対応に安心していた自分がいたからかもしれない。タクトの背中を見据え、私は涙を拭った。
「――でもリアに、俺たちと同じ部類の人間になれとは言わない」
もう一度、タクトが私の方に振り返る。
「確かに俺たち研究員は、理解しがたい思考回路をしているかもしれない。怯える気持ちも分かる。だから組織の研究に加担させるこ

とはしても、心まで組織の人間のようになる必要はないと俺は思っている」

タクトの言葉が心に広がっていく。でもそれは温かいものじゃなく、むしろ残酷なものとしてだった。

「勝手に連れて来られて監禁されて。目的も知らされないまま強制的に仕事さられせて、残酷な実験に付き合わされて。それなのに、心だけは『普通』でいてもいいなんて」

涙のおさまった目で、タクトを睨み付けた。

「そんな中途半端な優しさ、いらない」

タクトは黙った。私もこれ以上、何かを言うつもりはない。重く暗い沈黙が、部屋の中に広がった。得体の知れない恐怖感を押し殺すように、タクトを睨み続ける。先に視線をそらしたのはタクトだった。

3

「……今日はもう、仕事に出なくていい。ただし、明日は必ず実験室まで来い」

立ち上がり、ドアに向かうタクト。その姿を目で追う。

「絶対に来いよ」

ドアの前で立ち止まったタクトは、振り向くことなくそう呟いた。

「――やってやるわよ」

吐き捨てるように答えると、タクトは部屋から出ていった。

怪しい薬とか危険な薬とか、ここで研究されているのはそんなレベルのものじゃない。私だって今はこうして生きているけど、クロルチル製薬会社の研究チーム所属の人間じゃなかったら、「D・H」として使われていたのだろう。

最初に「研究に協力していれば殺されることはない」と言われたけど、それは「研究に協力しなければ実験台として使われる」という意味だったんだと思う。

それにザック……。もしかしたらもう、この世にはいないのかもしれない。別の研究チームに引き取られたあとのことは分からないなんて言ってたけど、こんなイカれた研究所の中にいる以上、無事でいるなんてことは考えられなかった。

でも今は悲しい気持ちよりも、激しい憎悪を感じていた。あんな

実験も研究も、人間として許されることじゃない。「ステルリン」以外にも、もっとヤバイ薬がたくさん作られているに決まっている。

この研究所が何の目的でイカれた薬を作っているのか、ここがどんな組織なのか、何としてでもつきとめたい。

リンやザックのことよりも、自分自身がここから逃げ出すことよりも、この研究所についての真実を知りたい気持ちの方が大きくなっていた。

私も元は、クロルチル製薬会社の研究チーム所属の人間だ。一研究員リア＝ウェルズとして、ここの研究に協力し、全ての謎を暴いてやる。必ず……。

1

私の中で、何かが吹っ切れた。感じていた不安も悲しみも恐れも――今は何故か、心の中に存在しなかった。

代わりに強い意志が生まれ、私を突き動かしていた。ある種の「心の麻痺」である感は否めないけど……それでも今の私には、それで十分だったんだ。

翌朝の実験室で、タクトは私の顔を見るなり「大丈夫か」と声をかけてきた。

「心配の言葉なんか、かけなくていいわよ」

「……そうか」

タクトの前を通り過ぎ、パソコンの前に座る。しばらくの間ずっと慎重になっていたけど、これからはできるだけ積極的に、情報を得るチャンスを利用していかなくちゃ。

このパソコンは私が使っているフォルダ以外、全てロックがかけられていて見ることができないし、インターネットにも接続できないようになっている。タクトが実験室から出ていったら、近い位置にある抽斗の中から手当たり次第に調べてみよう。

私は単調な作業を繰り返しながら、タクトが実験室を出ていく時間を待った。午後になったら食事のために席を外すから、そこが第一のチャンスだ。

午後一時を回った頃、タクトが席を立った。いつものように「食事に行く」とだけ声をかけ、実験室を出ていく。

実験室のドアが閉まるのを確認すると、立ち上がってパソコンから一番近い場所にある抽斗を開けた。ファイルが背表紙を上にして整頓されている。

各背表紙のラベルには年号が印刷されていた。一番古いものは「２０８０．１」となっている。今から八年前の一月のものらしい。それを取り出すと、ページをめくった。

一ページ目には人の名前と年齢、性別が一覧表になっている。これは……研究員の名簿？　一覧の中に「タクト＝コールダー」という名前がある。ナタリーの名前はなかった。

2

つまり八年前タクトは組織にいたけど、ナタリーはまだ組織の人間じゃなかったってことかしら。次のページからは薬品の名前と、その開発に関わったであろう研究員の名前が並んでいた。

パラパラとページをめくってからファイルを戻すと、翌年のファイルを出した。中身はさっきのファイルと同じく、名簿と薬品開発に関する一覧だった。特に変わったところもなく翌年のファイルへ。

そこで、名簿の名前に目が止まった。八十二年の名簿の欄の一番下に、「ナタリー＝ハメット」という名前がある。ナタリーは組織に入って六年か……。

ナタリーの方が後輩にあたるのに、タクトに対しても随分と上から目線な感じね。ま、あの性格じゃ上下関係なんて気にもしないか。

私はファイルを元に戻し、抽斗を閉じた。どのファイルも同じような内容みたいだし、ここには組織に関する情報もなさそうだし。

取りあえず今回はこのくらいにしておこう。ナタリーがいつ入ってくるか分からないし、タクトもそのうち休憩から戻ってくるだろうし。

しばらくパソコンに向かっていると、タクトが実験室に入ってきた。それと入れ替わるように私も席を立つ。

休憩しに行こうと思ったけど、さっきのファイルに書いてあったことについて軽くタクトに質問してからにしよう。私はコーヒーの置いてある棚に向かって歩きながら、タクトに声をかけた。

「ねぇタクト。この研究所って、どのくらい前にできたの？」

「……八年前だが。それがどうした」

「かなり組織に慣れているようだから。ずっと昔からあったのかな、って思っただけよ」

適当に誤魔化すと、タクトは疑う様子もなく口を開いた。

「俺は組織発足当時からここにいるからな。慣れてるに決まってる」

つまりさっき見たファイルの束は、研究所ができた当初からのデータということになる。私は何食わぬ顔でコーヒーを二杯淹れると、一つをタクトの席に届けた。

3

「あなた、二十七歳なんでしょう？　十代の頃からこんな危険な仕事をしてたの？」
「まぁな」
「どうしてこの組織に入ったの？」
タクトはカップを手にしたまま、立っている私を見上げた。
「秘密裏に動いてる組織なんでしょ？　普通に就職するような会社じゃないし。組織に入ったきっかけとか、何かあったんでしょ？」
少しだけ沈黙したタクトは、溜め息交じりに口を開いた。
「……俺には人並み外れた才能があった。それを嗅ぎつけた人間に、組織に加担するよう言われた。ただそれだけのことだ」
タクトはテーブルに向き直り、カップに口を付けた。
「いくら才能を買われたとしても、こんな閉鎖空間に閉じ込められるような就職口を選ぶ？　それに行ってるのは、人の道を外れた研究。それでも――」
カタッとカップを置き、タクトは目を細めた。
「『悪』というのは、時に魅力的に見えるものだ。当時の俺は、自分の才能を最大限に生かすことのできる場所を差し出され……その道を選ぶのに、何のためらいもなかった」
その言葉に、何を言えばいいのか分からなくなった。
「……もういいだろう。休憩を取ったらどうだ？　しばらく何も食べてないんだろ？」

「えぇ、まぁ……」

タクトに言われた通り、あれから一度も食事を口にしていない。そろそろ何か食べておかないと体調を崩しても困るし、少しでもいいから栄養を摂っておかなくちゃ。コーヒーを飲み干すと、実験室を出て食堂に向かった。

＋＋＋＋＋

午後からは一人になる機会がなく、今日の詮索結果は組織発足の年、タクトとナタリーが研究所に来た年だけだった。まだまだ情報は足りない。明日も引き続き、一人になる機会を狙って別の書類を漁ってみなくちゃ。

日記に今日のことを書き終えノートを閉じたとき、インターフォンが鳴った。もう十時を過ぎているのに、何の用だろう。

私はノートをチェストの奥にしまうと、ドアを開けた。そこにはファイルを手にした白衣姿のタクトが立っていた。

1

「……まだ仕事中？」
「いや。少し話がある」
もしかして、昼間に抽斗を開けていたことがバレた？　でも午後からはタクトもずっと一緒に実験室にいたし……。今になって言ってくるだろうか。
少し不安を感じながらも、私はタクトを部屋に入れた。タクトはテーブルにファイルを置くと、胡坐をかいて座った。
「お茶でよかったら飲む？」
冷蔵庫の前でタクトの背中に声をかけると、「いや」と答えが返ってきた。
「女性の部屋に長居するつもりはない」
「女性の部屋って……。どうせ私は監禁されてる身なんだし、そんな気遣いはいらないわよ」
呆れながら、テーブルを挟んでタクトの前に座った。
「前にナタリーが言ってたけど、本当に仕事でもオフでも白衣しか着ないのね。あなたの私服姿って見たことない」
「……ほとんど仕事しっぱなしだからな。別に必要ない」
今風な見た目なのに、全くお洒落に興味がないようだった。
「何だかもったいないわね、白衣しか着ない生活なんて」
「こんなところで洒落た格好をしたって、誰も見ないだろ」

確かにずっと研究所の中にいたんじゃ、お洒落して出かけるわけでもないし関係ないか。男の人だから余計に気遣うこともないかもしれない。――って、そんなことより大事なのはタクトの話の方だ。

「で、話って言うのは……？」

「明日からリアに、新薬の開発をしてもらう」

開発ってことは……私もタクトやナタリーのように、危険な作用をもたらす薬を作らされるってこと？

「ただし、薬の効果については俺から指示を出す」

「そうなの。どんな効果の薬？」

するとタクトは「解毒剤の一種だ」と答えた。

「ナタリーが開発した『フェートル』という毒薬があるんだが、その解毒剤のバージョンアップがまだなんだ。俺は他にもやらなきゃいけないことが溜まってるし、その解毒剤に関することをリアに任せることにした」

解毒剤ということはつまり、人に危害を加える薬ではないということになる。

2

「さすがに最初から毒薬の開発をしろと言っても、作業が手に付かないだろうからな。それにバージョンアップなら元の薬が出来上がってる状態にあるし、一から取りかかるよりやりやすいだろう」

その言い方からは何となく、優しさのようなものを感じた。

「言ったはずよ。中途半端な優しさはいらないって。解毒剤っていうのは、あなたなりに私を気遣った仕事内容なんでしょ？」

タクトは黙り込んでしまった。

「どうして私なんかに優しくしようとするの？　本来なら私は、実験台として殺されていてもおかしくない人間。優しさを注ぐ必要なんてないはずなのに」

それでもタクトは答えない。

「ここの研究者は、ハッキリ言って冷酷な人間ばかりなんでしょ。でもあなたは最初から、悪い人には見えなかった。それは私の思い違いなのかしら」

「思い違いだ」

「嘘よ。ねぇ、何か隠してるの？　組織のこと？　あなたのこと？　それとも――」

見つめると、タクトは目を伏せた。

「……分かった。そこまで言うなら、少しだけ昔のことを話してやる」

顔を上げるタクト。その目はいつもと違って、何故かとても悲し

そうに見えた。

「――俺には以前、恋人がいた」

「恋人……」

思いもよらなかった言葉に、何かが胸に詰まるような感覚がした。

「彼女も俺と同じく、才能を買われて研究所にやってきた。違ったのは、彼女は自分の意思でここにきた訳じゃないということ。

――彼女は脅迫され、無理やり研究に加担させられていた。『研究に協力しなければ、両親を殺す』と。彼女は身寄りが両親しかいなかったようでな。仕方なく、組織に言われるがまま毒薬を作らされていた。その指示にあたっていたのが俺だ。

彼女はいつも、気丈に振舞っていた。毒薬を作らされようと、二十四時間働き詰めにさせられようと、真面目に命令に従って働いていた。

『両親が生きるためには、私が頑張らないといけないから』――それが彼女の口癖だった。理不尽な運命にも、彼女は必死で耐えていたんだ。でも……あるとき、彼女は倒れた」

3

そこまで言うと、タクトは黙った。私の胸は、キリキリと妙な痛みを訴えている。聞いてはいけないことを聞いてしまったのかもしれない。何だか申し訳ないことを話させてしまった気もする。

「もういいわ」

タクトは首を横に振った。

「いや、大丈夫だ」

そして話を続ける。

「初めて彼女を『D・H・』の実験に連れていった日のことだった。彼女はある実験室にずっと監禁されていて、その部屋から出ることを許されていなかったから、人体実験が日常的に行われていたことを知らなかったんだが……。

新薬実験を行う部屋で彼女が見たのは、無残な人間の姿。それは開発途中の毒薬の実験で、人の身体を局所的に腐敗させる効果のあるものだった。

薬を投与され、手足の皮膚が見る見るうちに腐っていく中、泣き叫びながら必死で痛みを訴えていた人間――それを見た彼女は絶叫し、そして気を失った」

彼女の気持ちは痛いほど分かった。まるで、この前の私のよう。私以外にも、あんな思いをした人がいたなんて。涙が出そうになるのをこらえ、再びタクトの話に耳を傾けた。

「俺は気を失った彼女を部屋に運んだ。それまで当然のように行ってきた実験。俺も他の研究員も、何とも思わなかった実験。

でもそれは、自らの意思で研究に関わっているからこその『普通』だった。望んで研究をしてるわけじゃない彼女にとっては、それが恐怖でしかなかったんだと思う。

目を覚ました彼女は、声を上げて泣いた。あの実験を見て、今まで堪えてきたものが全て溢れ出したのかもしれない」

話を止めたタクトは、深い溜め息をついた。そのときのことが、頭の中に蘇ってきているのかもしれない。私は黙って、言葉を続けてくれるのを待った。

1

「涙と言えば実験台にされている人間のものという認識しかなくなっていて、俺は何をどうすればいいか分からなくなった。

仕事もあるし、さっさと部屋を出ていった方がいい。そう思って部屋を出ようとした俺を、彼女は引き止めた。

『怖い』――そう言いながら彼女は俺にしがみついた。俺の腕を強く抱き締めながら、彼女は震えていて……無理に引き剥がすことができなかった。彼女は一晩中、俺の腕を掴んで泣き続けた。

彼女が泣きやんだのは明け方。俺は今度こそ出ていこうと思ったけど、部屋を出る前、彼女に声をかけられた。『ありがとう』と、たった一言。研究漬けで非情な人間の俺に、彼女の言葉は重く感じた」

語っている表情はいつもと同じだけど、グリーンの瞳だけは何となく曇って見える。

「それから……彼女と付き合うことになったの？」

その問いには答えず、タクトは言葉を続けた。

「彼女はそれまでのように気丈な振る舞いとまではいかないものの、黙々と新薬の開発に取り組んでいた。そうしなければ両親が殺されると分かっていたからな。

でも時々……弱々しいものだったけど、俺にだけ笑顔を見せてく

れるようになったんだ。俺だって、自らの意思で毒薬を作っている人間なのにも関わらず。

その上あるとき、彼女は『あなたのような人が傍にいてくれて良かった』と言った。――俺もいつの間にか、彼女に心を許すようになった」

「愛し合って……いたのね」

絞り出すかのように、そう答える。

「ここの研究所にいる人間に、信頼関係などというものは存在しない。優しさも人間味もない。でも彼女からは、優しさを感じることがあった。それは彼女が脅されていたからこそだったと思う。皮肉な話だ。

それに組織の一員である俺が、監禁されている研究員と恋人同士なんて言えない。他の研究員に知られないようにしていたから、二人きりで過ごす時間なんてほとんど作れなかった。恋人らしいことも、大してしてやれなかったしな」

「それでも彼女は幸せだったと思うわ。きっとあなたと心を通わすまでは、怖い毎日を過ごしてただろうし」

私の言葉に、タクトは「そうか」と呟いた。

2

「脅されて研究していた彼女と同じような立場にいるから、私にも冷たい対応はしないってことなの？」
「意識的に優しくしてるわけじゃない」
「そう……。でも彼女とは別れてしまったんでしょ？　何かあったの？」
　するとタクトは、そっと目を閉じた。
「彼女は――死んだ」
　タクトの言葉に驚いて、思わず身を乗り出した。
「死んだって、どういうこと？　どうして？」
　タクトは目を開くと、視線をテーブルに落としたまま話を再開した。
「当時の組織は『D・H・』を確保するため、誘拐することを専門としたチームを作った。だが頻繁に誘拐事件を起こしては、いずれ足が付いてしまう可能性がある。
　チームの奴らはいろいろな作戦を立てていたようだが、そんなとき新薬の開発が終わり、実験をしなくてはいけなくなった。だが『D・H・』の用意がなく、実験が先送りになったんだ。
　だが組織の上層部は、何かと事を焦っていた時期だったからな。『D・H・』が用意できないなら、誰でもいいから研究員を使って実験をやれとの指示を出した。

当然、誰も実験台になどなりたくない。そこで誘拐を専門としていたチームのリーダーが、彼女の両親を騙すことにしたんだ。

両親には彼女について、『大きな企業の開発部に下宿して、自主的に研究に加入している』とあらかじめ説明されていた。監禁され、毒薬を作っているなんて知らない。

彼女の両親に『娘さんに会いに来ませんか』とチームリーダーが掛け合うと、両親はもちろん喜んで研究所にやってきた。そして睡眠薬で眠らされ……起きたときには牢の中だったというわけだ。

二人は『D・H・』として新薬の実験に使用された。母親はその実験で死亡。父親は生きていたものの、別の新薬実験へと繰り返し身体を使用され――数回目の実験で命を落とした」

3

酷過ぎる……。彼女は家族を守るために、必死で恐ろしい研究に耐えていたというのに。それに彼女の両親だって、娘がこんなところに監禁されていると知って、しかも実験台として死んでいったなんて。私も妹を組織に殺されているかもしれないから、彼らの気持ちは何となく分かる。

「俺も彼女も、そんなことは知らなかった。だがあるとき、彼女は実験室であるものを見てしまった。彼女が父親にプレゼントした、彼女の父親の名前が彫られた腕時計だ。

実験室の時計が壊れて、新しいものが届くまで一時的に置いていたらしい。彼女の父親の腕から外した腕時計をな。それを見た彼女は研究員から事実を聞かずとも、全てを悟ったらしい。

俺はチームの連中に事情を問い詰めた。そしてどういう経緯があったのかを知ったが、彼女に話せるはずもない。

でも彼女は、妙に落ち着いていた。というより、どこか冷めた目をしていた。心配の言葉をかけても『大丈夫』と言うだけ。何だか怖かった。そして……その怖さは現実のものとなった。

彼女は自らが開発していた毒薬を使って、研究チームの第一人者を殺害しようとしたんだ。復讐のために。

だがそれは未遂に終わり、彼女は捕えられた。何の抵抗もせず、言葉を発することもないまま、彼女は連れていかれてしまった」

タクトは視線を上げた。その目からは、涙がなくても悲しみを感じることができた。

「組織の反逆者として、彼女は殺されたってこと……？」

「そうだ」

胸が締め付けられる思いがする。それと同時に、怒りのような何かが込み上げてきた。

「それならどうして、こんな組織に協力してるの？　優しさとか人間味とか、そういう問題じゃないでしょ？　愛する人を殺されたっていうのに……。彼女だって愛する人が未だにこんな組織に協力してるってこと、天国で嘆いてるに決まってるわ」

1

「確かに、組織を恨んでいないと言えば嘘になるかもしれない。でも俺は……」
「何よ」
先を促すと、タクトははっきりとした口調で答えた。
「彼女が死んだこの研究所で、俺も一生を終えたいと思っている」
よく分からない感情が、心の中に広がる。そしてそれは、涙となってこぼれ落ちた。
「どうして泣くんだ」
「分からない……」
タクトの前で泣きたくなんかないのに、勝手に涙が出てきてしまう。私はテーブルの上のティッシュを一枚取ると、目元を押さえた。
「私、もしかしたら――」
そこで言葉を飲み込んだ。こんな形で気付くなんて、認めたくなかった。
タクトには大切な人がいて、それは今でも変わらないのかもしれない。その事実が、胸に突き刺さるような痛みを感じさせる。
監禁されている中で、タクトと接するときだけは温かさのようなものを感じていた。心を許せる人間がいない中、タクトと話しているときだけは恐怖を忘れられた。

ふっ切って組織の謎を暴こうと決心できたのも、タクトが与えてくれた――「リアに、俺たちと同じ部類の人間になれとは言わない」――という言葉のおかげだったと、今なら思える。

でもタクトから感じる優しさは、全て愛する女性から学んだものだったなんて。しかもその女性は、私と同じように脅されてここにいた研究員。

タクトに恋人の話を聞き始めたときから、何か心に引っかかるものがあった。それは私の中で生まれてしまった感情によってもたらされたものだったんだ。

「……大丈夫か？」

「ごめんなさい。……もう平気よ」

涙を拭い、気持ちを落ち着かせようと息を吐いた。

2

「前にナタリーが言ってたわよね。タクトは女性に興味がないとか、女遊びをしないとか。でもそれは、大切な存在がいたから――ということなのね」

タクトは私の言葉に頷くことなく、別のことを口にした。

「俺は優しい人間じゃない。『普通』の人間から見れば、自分のやっていることが『悪』であることも分かっている。それでもここの研究者である以上、俺は俺なりの筋を通して生きていく。俺はもう『悪』に手を染めた人間だからな」

前を見据えたまま、タクトは目を細めた。

「それにどっちにしろ、一旦この研究所に足を踏み入れてしまえば、死ぬまで出られるわけがない」

「組織を裏切って、外部に情報が漏らす人間がいるかもしれないから？」

タクトは「そうだ」と小さく頷いた。

「まぁ俺の場合、たとえ組織から抜けることができたとしても、今更行くあてもないけどな」

もしここから出ることができたとしても、組織の人間に捜し出されて、結局は殺されてしまうんじゃないか……。そんなことを考えていると、タクトが言葉を続けた。

「ただ自らの意思で研究をしていない人間にまで、俺たち研究員のような意思を持てというのは不可能なんだと、彼女の件で学んだ。だからリアにもそう言ったんだ。

でも『中途半端な優しさはいらない』と言われて、それは確かにその通りかもしれないと思った。……悪かったな」

謝られた私は、慌てて首を横に振った。

「いいのよ。タクトにはタクトの考えがあって、私には私の考えがあるだけのことだもの」

タクトは「いや」と呟くと、小さく溜め息をついた。

「――俺としたことが、少し話し過ぎた。今の話は忘れてくれ。研究には必要ない」

そんなことを言われても、忘れるなんてできるわけない。それどころか、心に大きな爪痕を残すこととなってしまった。

「これは解毒剤に関する資料だ。明日までに目を通しておいてくれ」

タクトはテーブルの上に置いていたファイルを、私の方へずらした。

「それじゃあ、もう部屋に戻る」

立ち上がろうとしたタクトに、慌てて「待って」と声をかけた。

3

「――この組織は、何の目的で存在しているものなの？」
真剣な口調で質問したけど、視線をそらされてしまった。
「知る必要はない」
「どうして？　私だって研究者として働いているじゃない。それなのに……」
キュッと唇をかみしめ、タクトを見上げる。
「組織が何の目的で存在していようと、リアに与えられた運命が変わることはない」
「確かにそうかもしれないけど、でも」
「知ってどうするんだ？」
その問いに、私は口をつぐんだ。
「組織のトップを殺そうとするのか？　組織自体を潰そうとするのか？」
「別にそういうわけじゃ……」
「とにかく、余計なことを考えるな。指示に従っていろ。殺されたくなければな」
タクトの恋人は組織に反抗して殺された。だから同じような立場の私に、組織について必要以上の情報を与えたくないのかもしれない。
タクトは口が堅そうだし、やっぱり自分で少しずつ探りを入れていくしかないか……。組織の全貌についても知りたいし、リンのことについても事実を確かめなくちゃいけないし。

「今度こそ部屋に戻る」
私は立ち上がったタクトの後について歩いた。
「――ねぇ」
ドアを出る前、タクトの背中に声をかけた。
「今でも……彼女のことを想ってるの？」
振り返ったタクトを見上げると、何だかまた涙が出てきそうになった。
「彼女は死んだんだ。今更どんな気持ちでいようと関係ないだろ」
それは明確な答えではなかった。
「明日もいつも通り、資料を持って実験室に来い」
タクトの声に無言で頷き、閉まったドアのロックをかける。ゆっくりとテーブルの前に戻って座ると、タクトが置いていったファイルを開いた。

1

「何やってんだろ、私……」

出てきた声はかすれていて、虚しさが一段と大きくなった。ポタッという小さな音を立て、ファイルの上に涙が落ちる。

ここがどんなに危ないところかってことも、私はここに監禁されてるんだってことも、ちゃんと理解していたのに。どうしてだろう。どうしてタクトのこと、こんなにも気にしているんだろう。

タクトの彼女も、私みたいに複雑な気持ちだったのかな。でも彼女はタクトと愛し合っていたわけで……。気持ちがごちゃごちゃして整理できなかった。

＋＋＋＋＋

結局その夜は、ほとんど眠れなかった。言われた通り渡された資料に目を通したものの、あまり頭に入ってない気がする。

朝の実験室には誰もおらず、少しだけホッとした。何となくタクトに会いにくい気分だったから。どうせこのあとすぐ、顔を合わせることになるのは分かってるけど……。

眠気覚ましにコーヒーでも飲もうかなと思い、ポットに水を入れた。電源コードを差して、お湯が沸くのを待つ。ボーっとしながら椅子に座っていると、ナタリーが入ってきた。

「何シケたツラしてんの？　朝から」
「ちょっと寝不足なだけよ」
「ふーん。コーヒー淹れるなら、アタシのも用意してよね」
言いながら、ナタリーは棚の資料を出している。

「ねぇナタリー。あなたはどうして、この組織に入ったの？」
「は？　急に何？」
「深い意味はないわ。お湯が沸くまでの時間潰し。雑談よ」
ナタリーはチラッと私を見ると、ファイルを開きながら答えた。

「理由なんかない」
「理由がない理由は？」
「……めんどくせーな、もう」
パタッとわざとらしい音を立て、ナタリーはファイルを閉じた。
「毒薬の研究には莫大な金がかかる。それを全て組織が出してくれるんだ。魅力的だろ？」

私は立ち上がり、カップを二つ用意しながら質問を繰り返した。
「どうして毒薬なんか作りたいの？」
「――破壊衝動さ」
「破壊衝動？」
振り返ると、ナタリーは棚にもたれて腕組みしていた。

2

「毒薬は人間を内側から壊すこともできるし、『ステルリン』のように外側から壊すこともできる」
「……それで？」
「そんな優れモノを作れる頭脳がアタシにはあるんだ。使わないと損だろ？」
何という思考回路。信じられない。
「その素晴らしい頭脳を、もっと別のものに使おうとは思わなかったの？　苦しんでる人を助けるためとか、世界に役立つ研究とか」
私の言葉に、ナタリーは「絶対イヤ」と吐き捨てた。
「――アタシはね、何もかもが滅びればいいと思ってるんだよ」
ポットのアラームが鳴る。お湯が沸いたらしい。
「あなたって、どこまでも冷たい人間なのね」
「そう？　組織の人間からすれば、それは褒め言葉みたいなモンかもよ」
「もういいわ」

会話を打ち切ると、すぐにコーヒーを淹れた。それを一つ、ナタリーがファイルを見ている台の上に置く。
「何の資料？」
「アンタのニガテな毒薬の開発記録だよ」

なかなか部屋を物色する機会もないし、さりげなく見ておこう。
私は資料に目を通しているナタリーの隣でコーヒーを飲んだ。

「――逃げる方法なんか載ってないよ」
「……」
不意の言葉に困り、思わず黙ってしまった。
「アンタの考えてることなんか、全部お見通しだっつーの」
ナタリーの視線が私に向く。

「私は別に……。もし逃げ出したとしても、どうせ見つけて連れ戻されるんでしょ？」
「連れ戻されるだけならまだいいさ。ここの連中は基本的に気が短いし、逃げたら間違いなく殺されると思っときな」
「……逃げるつもりなんてないわ。私にだって、いろいろ考えがあるんだから」
「へぇ。どんな？」

ナタリーに尋ねられたとき、実験室のドアが開いた。タクトが中に入ってくる。
「昨日の資料に目は通したのか？」
「……えぇ。取りあえず一通りは」
「そうか。それじゃあ部屋を移るぞ」

私はコーヒーを飲み干し、カップを洗った。昨日渡されたファイルを持ち、タクトと一緒に実験室を出ようとする。

「――リア」
呼ばれた声に振り返ると、ナタリーは薄っすら笑みを浮かべていた。

3

「組織に潰されたくなけりゃ、余計なことを考えず仕事に打ち込むことだね。クロルチルの研究チームにいたっていう頭脳を使ってさ」
「……ご忠告どうも」

実験室を出てドアが閉まると、タクトは私を見た。近い距離で目が合い、妙にドキッとした気分になる。

「ナタリーと何を話したんだ？」
「大した話じゃないわ。ただの雑談よ」
「そんなふうには思えなかったが」
「気にしないで。ホントに大した話じゃないから。……で、私はどこに行くの？」

タクトは「こっちだ」と言い、食堂へ向かう廊下を歩き出した。そして一度も入ったことのない部屋――「実験室E」と書かれたドアの前で立ち止まった。

カードキーでロックを解除し、中に入る。いつもの実験室に比べて随分と狭いけど、テーブルや実験器具、棚などが似たような配置でぎっしり並んでいた。

「今日からここが、リア専用の実験室になる」
タクトはカードキーを一枚、私に差し出した。
「この部屋のキーだ。自由に出入りしてくれて構わない」

カードキーを受け取ると、中央のテーブルに歩み寄った。テーブ

ルにはファイルや冊子がたくさん積んである。

「それは関係資料だ。現在までのバージョンについてまとめたものや、薬品に関する冊子を集めておいた。バージョンアップに関しては、そこにある資料だけで十分のはずだ。この部屋の中にある器具も、全て自由に使ってくれて構わない」

タクトの言葉に頷きながら、テーブルの上にあった冊子の一つをめくってみた。実験器具も高度なものが揃っているし、資料もたくさんあるし、大丈夫だと思う。

「バージョンアップに関する項目については、昨日の資料にあった通り。クロルチルの研究チームにいたなら、そんなに難しい内容ではないはずだ」

「いつまでに仕上げればいいの？」

タクトは視線を宙にやると、「そうだな……」と呟いた。

「最初だし多めに時間を取って、一ヶ月以内に完了するように進めてくれ」

一ヶ月の期間があれば、分からないことが出てきても何とかなるだろう。

1

「休憩は好きなときに取ってくれ。毎日の終了時間も適当でいい。ただ一日一回は、様子を見に顔を出させてもらう」
「分かった。それじゃあ早速、作業に入るわね」
実験室を出る直前、タクトは振り返った。
「これで全く成果を出せなければ、お前に対する待遇は悪化することになると忠告しておく。真剣に取り組むんだな」
「……心に刻んでおくわ」
ドアが閉まるとロックをしっかり確認し、室内にある棚や抽斗を片っ端から調べていった。この実験室はカードキー式。マスターキーはタクトしか持っていないみたいだし、ナタリーに見つかることはないだろう。
棚や抽斗の数はそれなりにあるものの、中身は空の状態になっているものが多かった。私がやる仕事に関係するもの以外、全て別の場所に移動させられている？
――でもそうよね。この部屋には私一人となるんだし、いろいろ探られると思うに決まってるか。期待してしまっていた分、少しがっかりした。大人しく仕事に移るしかないか。
私は資料を見ながら、解毒剤のバージョンアップに着手した。クロルチルの研究チームにいた頃も薬品は扱っていたものの、それは怪我や病気のための薬であって、解毒剤というジャンルは初めてだ。根本が同じとはいえ、勝手が違ってくる。

分からないことが出てきたら薬品に関する冊子や本で調べたり、実験器具を使って薬品の成分を細かく見ていったり、集中して進めていった。

＋＋＋＋＋

一日一回は様子を見に来ると言っていたけど、夜になってもタクトは実験室に現れなかった。一応、一日の報告か何かした方がいいのかしら。今日は現在のバージョンについて細かく調べることくらいしかやっていないけど。

七時過ぎに作業を終えると、夕飯を済ませてからタクトの部屋に向かった。インターフォンを押してみたけど、返事がない。

まだどこかで仕事をしているのかも。そう思って自分の部屋に戻ろうとしたとき、エレベーターの方向からタクトが歩いてきた。

2

「あの、今日の作業なんだけど……」
タクトは左手を押さえている。その手元から、血が流れているのが見えた。
「どうしたの！？　その怪我！」

タクトに駆け寄り、血の流れていた左手を取った。掌に大きな切り傷ができており、白衣の袖まで赤く染まっていた。

「割れたガラスで切っただけだ。大したことない」
「大したことないってレベルじゃないわ。早く手当てしないと」
「利き手が無事だし、手当てくらい自分でやれる」
「ダメよ、そんなの。処置室か何かないの？」

タクトはカードキーをいれながら「平気だ」と答えた。
「部屋に応急処置のセットが置いてある。お前は戻ってろ」
「そんなに血が出てるのに、放っておけるわけないじゃない。悪いけどタクトの部屋、入らせてもらうわよ」

ロックを開けたタクトに続き、半ば強引に部屋に入った。室内はナタリーの部屋と同じ作りになっている。

「セットはどこに？」
「そこの棚、一番上の段だ」
言われた場所から救急箱を取る。
「先に傷口を洗ってきて」

水道で傷口を洗ってきたタクトは、黒いロングソファに腰掛けた。

その前に膝をつき、救急箱から必要なものを取り出す。

「救急箱を出してくれただけで十分だ。あとは自分でやる」

「何を言ってるのよ」

タクトの左手を掴み、傷口を確認した。掌を真っ二つにするように長い傷は、そんなに深くなかったものの、手首まで達しようとしている。

私は取りあえずガーゼで血を押さえながら、袖を捲ろうとした。

「やめろ！」

タクトが声を荒げるのと、私が白衣を捲るのは同時だった。

「――！」

肘近くまで捲った袖。露わになったタクトの腕には、赤黒いアザのようなものがいくつもできていた。

「何……これ……」

タクトは黙って袖を元に戻し、顔をそらした。

3

「あ……いえ、とにかく先に手当てするわ」
血が付かないくらいのところまで袖を捲り、テーピングを施した後で包帯を巻いた。左手はほとんど包帯で隠れてしまっている。

私は救急箱を元の棚に戻すと、ソファで黙り込んでいるタクトの隣に座った。
「左腕……どうしたの？」
「古傷みたいなものだ。何の痛みもない」
顔を上げ、タクトの横顔をじっと見つめた。

「それを見られないように、どこにいても白衣を羽織ってるの？それに白衣の下も、あなたは常に長袖の服を着ていた」
タクトは言葉を発することなく、視線を床に落とした。

「もしかして、組織の人間に何かされたの？」
「そういうわけじゃない」
「じゃあどうして――」
「何でもいいだろ」

強引に言葉を遮られてしまった。タクトの左腕にあったのは、どう考えても『普通じゃない』痕だった。単なる怪我とは思えない。何かあったに決まっている。

「あなたのこと、聞かせてほしいの」
できるだけ落ち着いた口調で言うと、タクトは顔を上げて私を見た。

「お前には関係ないだろ。俺のことを知ったところで、何の役にも立たない」

そんなふうに言われても納得できなかった。

「でもタクトのことを、私を監禁している組織の人間として割り切れない。現にこの一ヶ月、毎日あなたと会ってるんだもの。あなたにとっての私は、ただの部外者かもしれないけど」

タクトは溜め息をつき、顔を正面に戻した。

「何かにつけて感情を持つな。人間らしい感情を持てば持つほど、ここでは精神的に苦しくなるんだ。『D・H・』を見て分かったはずだろ。お前に『普通』の感情を捨てろとは言わない。でも、余計なことまで考えるのはやめろ」

そんなことは分かっている。私だってあの実験を目の当たりにして、あまりの残酷さに気が狂いそうになったのも事実だから。でも、それでも――。

1

「私、あなたのことを好きになってしまったかもしれない」

自分から世界を奪った組織の人間を好きになるなんて、馬鹿げてる。そう思って頭から追いやろうとしていた気持ち。

でも口に出してみると、そんな迷いも消えていく気がした。私はタクトのことを好きになってしまっていたんだ、と。

タクトは正面を向いたまま、言葉を発しない。沈黙が続くのが嫌で、私は付け加えた。

「だからどうってわけじゃないんだけど……。ただそう思ったから、伝えただけなの」

するとタクトは、低い声で呟いた。

「――二度と口にするな」

一瞬、言われたことが理解できなかった。

「あの、別に、タクトに迷惑をかけるつもりなんかないの。それとも、私みたいな部外者には……好かれるだけでも迷惑？」

「言っただろ。何かにつけて感情を持つな、と」

タクトがこちらを向く。目が合うと、急に胸が痛くなった。

「そう……。迷惑なのね……」

呟きながら、涙が出そうになるのを必死で堪える。タクトの前で泣きたくなかった。私は無理に平然とした表情を保ち、タクトに顔を近付けた。

「でも――感情なんて、理性で押し殺せるものじゃないのよ」

そっと目を閉じ、タクトの唇に自分の唇を重ねた。ほんの一瞬だけのキス――。顔を離してみると、タクトの表情には何の変化もなかった。

「どうして避けなかったの？　私の気持ちが迷惑だって言うなら、ハッキリと拒絶すればよかったのに」

タクトの唇に触れたときの柔らかくて温かい感覚が、私の中に刻まれていく。

「――ずるい人ね」

これ以上ここにいたら、涙が抑えられない。私はタクトを見ないように立ち上がると、何も言うことなく部屋を出た。ドアが閉まった瞬間、堪えていた涙が溢れる。すぐに自分の部屋に戻り、ベッドの上で布団を抱き締めた。そして声を押し殺して泣いた。

2

そう、私は組織の正式な一員じゃない。あくまで利用されているだけの人間。いつ殺されてもおかしくない人間。そんな私が組織の研究者に恋をするなんてことに、何の価値もないんだ。

思わず気持ちを口にしてしまったけど、それは「思わず」なんてことで済まされる問題じゃない。私はただ研究のために、頭脳を使わされるためだけに、ここにいるのだから。

＋＋＋＋＋

気が付くと眠っていて、すっかり朝になっていた。朝になっていたといっても、時計で時間を確認しただけ。ここには窓がないから、空を見ることさえできない。

このまま死ぬまで空を見れないのかな、とふと考えて虚しくなった。普段の生活の中で、わざわざ空を見上げることなんてなかった私。今は思う。もっと空を眺めても良かったな、って。

着替えてもいないし、メイクも落としていないし、シャワーも浴びていない。何もしていない状態で迎えた朝だけど、専用の実験室で行う仕事だし、急いで行く必要もないだろう。

まずシャワーを浴び、髪をセットした。次に鏡の前でメイクを始める。ファンデーションからアイメイクまでやり終え、最後にリッ

プクリームを塗ろうとしたとき、ふと手が止まった。鏡の中の自分を見ながら、そっと唇に指をあてる。

タクト……今日は実験室に顔を出すかしら。あんな形で部屋を出てしまったから、正直なところ会いたくないけど。でもきっとタクトには、気まずいなんて感情もないんだろう。

好きになるのも気まずくなるのも苦しくなるのも、全て私の一方通行な気持ちなんだ。そう思うと悩むだけ馬鹿らしい――と無理やり自分に言い聞かせ、メイクを完了した。

昨日の続きを始めたのが昼前。お昼ご飯は食べる気にならなかったから、そのまま通しで夕方まで仕事をした。タクトは顔を見せていない。

ここにはコーヒーとか一服できるものも置いていないし、いつもの実験室に休憩がてら顔を出してみることにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1531v/

「Ｄ．Ｈ．」

2011年11月7日13時03分発行